

アサイ、ロンドリナの農業と日系人社会

—— トレス・バラス移住地を中心として ——

進藤賢一

1. はじめに

ブラジル連邦共和国は、22の州と5つの連邦地区から構成されている。また、ブラジルは面積851万km²（日本の23倍）、人口1.2億人の大国で、南米大陸の約半分を占める面積を有している。発見したポルトガル人は、そこには常に「植えつけて生長するのを待ちさえすればよい国」と規定し、また、あるヨーロッパ人は「毒蛇と熱病とインディオと革命の国であるが、同時に、エル・トラド（黄金郷）で、そこには処女地と、安あがりな成功と、平和な天地がある」とも定義した。広大な熱帯雨林と熱帯サバナの展開するこの熱帯大陸は、16世紀のはじめポルトガルの航海家、ペドロ・アルバレス・カブラルの発見、そして植民地化の過程で大きな変貌を余儀なくされた。最初は、北東部の臨海地帯に砂糖きびのプランテーションをつくり、黒人労働力を使役したが、18世紀末には、東南部に新らしくはじまったコーヒー栽培に奴隷を連れた多数の開拓者が移動し、コーヒー生産が興った。奴隷解放の後、やがてファゼンデイロ（大農園主）は多数の外国からの移民をコロノ（賃金労働者）として入植させ、コーヒー栽培の契約農場化によって、農地を拡大していったのである。日本人のブラジル移住が本格化するのは1920年になってからで、大半の人々はコーヒー農園のコロノの性格で、ファゼンダに雇用され、数年後にはシテアンテ（自作農）へと転進、なかには、ファゼンデイロになって成功する人々もあらわれて今日までの移住70年の歴史を形づくっている。

本稿では、ブラジルにおける日本人移住の経過を概括し、画期と形態を分析して、開拓上の特質を述べ、その具体的事例をパラナ州のトレス・バラス移住地にとって、戦前・戦中・戦後の生産、生活、思想の変化をみるとともに、近隣のロンドリナ開拓と今日の農業実態を明らかにする。調査の方法は、大部分が現地での聞きとりであり、資料は、農務省ロンドリナ支所での最新版を利用し、不足した部分は、末尾に示した参考文献によって補った。

2. 日系人のブラジル移住の画期と形態

南米諸国への日本人移住は、奴隷にかわるべき労働力の補給的性格が強く、かつプランテーション農園での低賃金労働力を形成する結果となったが、渡航目的は出稼ぎ、金儲け、送金、帰国を夢みる出稼労働者であった。

ところで、ブラジル移民が、ハワイ、ペルー、アメリカ合衆国本土への移民と異なる点は第1に、ブラジル政府が稼働力3名以上の家族移住を要求したこと、従って、その条件を満たすために形式的にも養子縁組や夫婦構成、形式家族の結合が必要となり、単身の出稼ぎ移住が制限されていた。第2は、1894年以後官約移民から民間移民会社による移住のあつ旋、輸送がはじまり、営利的目的ではあれ、数多くの民間業者が登場したことである。会社利益を優先させるために、移住熱を国内に振りまいたことも事実である。そのため、多くのトラブルが生じ、ブラジル移民は、ブラ拓（ブラジル拓殖組合）、海興（海外興業株式会社）の政府系団体および会社が当るようになっていった。

日本人のブラジル移住は、一般に3つの形態があり、移住時期も3期にわけるのが適当であろう。

形態の第1は、雇用主との間に所定の契約を結んでの、賃金労働に従事する「雇用移住」で、1908年の移住開始から第二次大戦突入時の1941年までの移住者約20万人のうち、90%がこの形態の農業移民であった。戦後、続開した移住も1952～56年ごろまでは、この形態が多く、その後

65年ごろにかけては「呼び寄せ移住」が上位を占める。

形態の第2は、この「呼び寄せ移住」である。既に移住している家族、農業者が、日本に在住の近親者、知人、友人などをブラジルに呼ぶことがきっかけで移住した人々である。戦前この形態は少なかったが、1955年から62年にかけては、毎年1000～4000人の単位でこの移住者がブラジルに渡った。

第3は、自作農移住である。この場合、渡航前に移住先の農地を購入するか、ブラジルの国営移住地に入植して自作農を営み、その後分割払いで農地購入したものを含んでいるが数的にはそう多い比率は示さなかった。

移住者数は戦前（1908～41）は196,737人、戦後（1952～78）には、52,385人に達した。その時期区分は、3期に分けられよう。

I期、実験入植期（1908～21）、サンパウロ州政府が、コーヒー、コロノに対しては船賃の半額を補助した時期で、定着率が悪かった。

II期、雇用移住全盛期（1922～41）サンパウロ州政府の補助金打ち切りにより、日本政府が渡航費の一部を補助するとともに、海外興業KKを援助、38年以後は国策会社ブラ拓が移住事業にのり出すなどの全盛期で、第2次大戦前の移住者の85%に当たる168,000人がこの期にブラジル行きを果している。

III期、戦後移住期（1953～78）、この雇用移民、自由移民（双方で48%の25,119人）、呼び寄せ移民（46%の24,368人）に加えて、日系企業の進出に伴う技術移住者（6%の2,898人）も加わり、多様な移住形態で入植者が展開するが、絶対数は5万人強で、戦前移住の1/4にとどまった。

移民としての仕事内容は、

コーヒー・コロノ、つまりコ

ーヒー栽培から収穫に至る作業に従事する賃金労働者であった。契約は賃金と出来高払いの組み合わせが多かった。契約期間は1か年づつの更新で、取扱うコーヒー樹数による年間賃金支払い額を12分割して、毎月支払い、収穫期には採集出来高に応じての加給金が支払われたのである。その他、コロノ達には、住宅地の周辺にわずかばかり「余作地」〈ロコーダ〉が与えられ、自給用菜園、穀物生産に利用していた。コロノの生活は、毎月の賃金、出来高払い、余作地の食料や家畜を加えれば、家族の生活は成りたち、労働投下量が多ければ、後に自作になるための余剰部分の蓄積も可能であったが、渡航費の返済、母国への送金、粗食と過重労働による病気やけがなどに悩まされた人々も多く、コロノ生活は決して楽なものではなかった。

コロノ生活からの脱出、それは賃金の蓄積以外方法はなかったのである。自作地の購入は土地会社が分譲

(第1表)
日本人のブラジル移住(1)
(1908～41)

1908～10	1,714
1911～15	13,371
1916～20	13,576
1921～25	11,350
1926～30	59,564
1931～35	72,661
1936～40	15,473
1941～45	1,277
計	196,737

〈外務省統計による〉

(第2表)
日本人のブラジル移住(2) (1952～78)

	農 業	技 術	呼寄せ	計
1952	54			54
53	1,458	16	6	1,408
54	3,444	6	74	3,524
55	1,416	37	1,204	2,657
56	2,503	35	1,832	4,370
57	1,838	17	3,317	5,172
58	1,885	50	4,377	6,312
59	2,929	92	4,023	7,041
60	3,382	123	3,327	6,832
61	2,052	122	2,972	5,146
62	658	71	1,101	1,830
63	537	89	604	1,230
64	291	108	352	751
65	163	169	199	531
66	363	280	142	785
67	268	233	137	638
68	211	114	95	420
69	217	99	63	379
70	246	104	101	451
71	284	118	54	456
72	294	199	64	557
73	154	152	72	378
74	71	144	55	270
75	110	124	51	285
76	107	135	58	300
77	76	130	45	251
78	111	131	43	285
計	25,119 48%	2,893 6%	24,368 46%	52,385 100%

〈国際協力事業団の統計による。〉

する原生林で、年賦分割払い条件によって開墾を進めたが、そこまで到達できない人々は刈り分け農（ア・メイア）や借地農を自作農との中間段階として行った。

海外移住の目的の大半は、出稼ぎ→金儲け→帰国にあったが、自作地を所有し、更なる増地を実現、シチアンテ（自作農）からファゼンデイロ（大地主）に成長する者は、次第に定住性を帯びてくる。第2次大戦による日本の敗戦は、帰国の夢を坐折させ、定住化を一段と促進する動機を与えた大きなエポックであったといつてよい。

低賃金のコロノ生活を体験した移民のなかには、更なる低賃金労働者であるメスチソやムラート（カボクロ）が存在していることを認識し、これを使役して商業的農業を営む方が有利との判断から、地主階級への道を歩む人々と、粗食と重労働に耐えかねて、ファゼンダを点々とかわり、やがてコロノに見切りをつけて都市労働者や鉄道工夫などに流出する日系人もあらわれはじめ定着か、移動かの選択に直面した人々が数多く出たのである。

1928年にブラジル開拓組合（ブラ拓）が設立してからは土地を享有し、定住、定着運動が唱導されて、直来移民などの自営農家を奨励したため、次第に定着率は上昇した。

移住日系人の農業パターンは、一般に奥地型と近郊型にわけられる。

コーヒー、大豆、コーン、フェイジョン、ピーナツは奥地型、果樹、野菜、花卉は近郊型といえるが、年とともに次第に相互乗り入れが行われ、はっきりした2つのタイプがわかりにくくなる。奥地開発は、コロノ（契約農）としての就労期限が終わり、分割にせよ、土地購入が可能な資金蓄積が行われた段階からはじまるが、その対象はコーヒー園で、介在役は鉄道の奥地への敷設であった。サンパウロやリオ・デジャネイロから奥地には1860年ごろから鉄道が敷かれ、1935年まで10本もの鉄道開道となったほどである。鉄道の開通は、コーヒーの定植地をサンパウロ州からパラナ州へと拡大し、これまで自給作物であったコーン、フェイジョン、マンジョーカなども商品化される結果を招いた。

日系人がコーヒー栽培に着手したのは、1913年、ノロエステ線沿いのリンス駅近くの5アルケールとされている。その数年後は、ノロエステ（1908年）、ソロカバナ（1875年）の両鉄道沿線は、多くの日系人によって原始林が焼き払われ、コーヒーの新植が進んだ地であった。1929年の世界恐慌は、世界のコーヒー市場をも直撃し、ブラジル産コーヒーは生産過剰に追いこまれる。これに対応したバルガス政権はサンパウロ州のコーヒー樹新植を禁止する反面、パナマ州は創生期を理由に適用除外し、1500万本の新植を許可したため、日系人はコーヒー生産のためパラナ州移住を強めた。特にトレス・バラス、ウライ、ロンドリナなどの北パラナは、この時期のコーヒー熱で開拓されていった地といえる。

1932年の調査によると日系移民所有のコーヒー樹は6200本とあるが、65%の4万本はパウルー、リンス、アラサーバに向うノロエステ沿線に、20%の12万本はロンドリナ方面に通ずるソロカバナ沿線であった。コルネイロ・プロコピオ、ロンドリナ、マリンガの北パラナ地区は、1930年代のトレス・バラスへの日系人移住、ブラ拓をはじめイギリス・ドイツシンジケートの土地分譲で、一面コーヒー園と化したか、その背景には、肥沃なテラローシャ土地帯に重なっていたことが幸運したことは論をまたない。

1932年、日系コーヒー農家はサンパウロ州が全ブラジル日系農家の94.2%に当る5,316戸であったのに、1958年には、サンパウロが49%（1,554戸）、パラナが46%（1,451戸）と双壁をなすコーヒー地帯を形成するに至った。同年のブラジルコーヒー生産に占める日系農家比率は6.4%であったが、パラナは13.4%と比重を高め、7.5%のサンパウロに大きく水をあけることになったのである。

他方、契約農を中途放棄したり、完了してサンパウロなど都市近郊に移動した農業労働者は、大根、かぶ、白菜、ゴボウ、なす、キュウリ、トマトなどの野菜づくりを開始した。

トマトは、親指大の野生種はあったが、大玉のものは日系人が改良し、定着させた。1935年のサンパウロ州農務局の調査では、「野菜生産高の70%は日本人農家によって生み出されたとしている」としている。イチゴ、モモ、ブドウ、メロン、ミカンなどの果菜類、果実の生産が拡大していったのも日系移民が中心になって進め、小家畜の飼育にもり出すなど、近郊農業の成果も大なるものがあった。

第2次大戦後間もない1947年から5年間のブラジル農村協会発表の日系農家の生産物占有率は第3表となっているが、20年弱の間にこれだけの変化があったとは思われにくく、統計上の問題も若干あろうかと推定される。

パラナ州に限定してみても日系農家の生産比率が高いのは、コーヒー、棉、大豆、小麦、ブドウ、ハッカ、ラミー、とうもろこし、フェイジョン、ジャガイモ、そばなどであり茶とラミーの占有率は90%を超えている。1947年から64～5年にかけて日系農家の生産比率が落ちているのは、現地人への伝達の跡を物語るものである。

(第3表) 日系農家の農産物生産比 (ブラジル)

	ブラジル 農村協会資料	ブラジル農業 技術研究会 (ABETA)資料
	1947	1964～5
コ　ー　ヒ　ー	20 %	8.8 %
棉　　　　　花	35 %	13.7 %
米	20 %	4.2 %
野　　　　　菜	70 %	—
(ト　マ　ト)	95 %	58.1 %
(じゃがいも)	60 %	41.1 %
バ　ナ　ナ	50 %	6.0 %
ハ　ッ　カ	90 %	50.0 %
マ　　　　　ユ	90 %	80.0 %
鶏　　　　　卵	90 %	43.8 %
ラ　ミ　ー　麻	—	91.7 %
コ　シ　ョ　ウ	—	82.0 %
茶	—	92.1 %

— 線は統計取れず

3. 日系移民の入植開拓上の特質

ブラジルへの日系移民の急増は1920年代からであるが、その大部分はコーヒー園コロノでの契約農(普通5～6年をめぐりに1か年契約)で出発し、ある程度の資金蓄積(6年働いて10～20コト、1コトは1,000クルゼイロ)と労働契約期間の終了により、奥地未開地に土地購入し、自作農となっていく。その経営規模は一般的には25ha(10アルケール)程度の小規模なものでコーヒー、稲、棉花栽培を中心にした者が多かったが、無肥料の略

奪農業を展開したため、地力が低下すると、更に奥地を購入して開墾するなど、移動式とも思われる農法もみられた。日系移民は、南欧諸国、その他からの移住民に比較し、辛抱と忍耐、先見性と技術研究心など持ち前の性格を発揮し、他国移民を凌ぐ発展を遂げながら第二次大戦後を迎えるが、そのころからいろんな変化があらわれる。

第1に、ブラジル経済のなかにおいても、次第に農工間格差、都市と農村の所得格差があらわれるようになる。自小作農に転出したコロノが、その後更に増地を果して自作農(シチアンテ)や大地主(ファゼンデイロ)になることは容易なことではなかった。“農業は一世一代限りでよい、子弟には学問を授け、農外の仕事につかせよう”とする風潮も高まり、“農業継続は子孫の独立まで”と頑張った人々が次第に離農していく。日系人の離農率は毎年1%ほどのゆったりしたカーブで推移し、1958年の55.9%から78年には36%へと日系農家数比率は減少していった。

第2は、日系移民の体質でもあるが、古い篤農家としての精神は旺盛で、人脈を大切に作る気概は強いのであるが、企業家的ファーマーとしての経営感覚に乏しい性格が、企業的農業への道、ファゼンデイロへの道を阻んでいったことも指摘されているところである。黒人、インディオ、メスチソ、ムラートなどの農業労働者を使役し、企業として常に操業ベースを考えた経営を行うというよりも、むしろ、“クロチャンも、半グロも仲良く、一緒に働いて生活を成りたさせる”の思想が支配的であった。特に、一世の世代は、そうした考えが濃厚であった。

離農による都市への人口流出は、都市人口を膨張させ、都市域を拡大(サンパウロ市は21世紀初頭、世界一の人口を擁する都市になることが世界的に予側されている)させて、農耕地価が急上昇しているうえに、この数年来のインフレが災して、営農による生産コストの圧迫で拡大再生産の道が閉ざされつつあるのが実態である。近郊地域での農民層分解も次第に顕著になっているが、日系農家の全般的傾向としては、分解が進みながらも農産物生産量を伸ばしてきており、土地生産力向上のた

めの努力と、規模拡大への道をあきらめたというようには理解しにくい。

第3は、入植者の移動と作目選択の多様性の問題である。略奪農業は地力の低下を招くので施肥技術が未熟な段階で輪作体系が施されない限りでは土地の移動はさけられない。気温は熱帯、亜熱帯、温帯を反映して比較的高温であるが、南部は降霜がよくあり中西部は早魃の影響がやすいのである。マツグロッソ州のリオ・ネグロとベルジゴンの二植民地は多くの日本人がコーヒー栽培のために入植した土地であるが再三の降霜害で、今日では雑作と果樹に転換し、コーヒー作りはみられない。同州クヤバ市北方のリオ・フェーロ植民地は1960年ごろサンパウロ州から50戸ほどの日系農家が入植しコーヒー栽培、ゴムの定植を行っていたが、悪性マラリアの発生と、運賃コストが高く採算ベースにのらないなどの理由で、日系人はすべて撤退し、土着人が変ってほそぼそと自給農業を行うなど移動がはげしいのである。

南部のパラナ州は、北側のパラナ鉄道沿線に1930年代、多くの日系人が移住したが、この地域への入植は、英国系シンジケートの土地会社の分譲地であったため自作農（シチアンテ）が多く、コーヒー栽培に従事する人々も多かった。50万アルケール（125万ha）のテラローシャ土（赤紫色土）は肥沃で、サンパウロ州やミナス州から移動した者はたちまちにして原生林を切り開き、コーヒー樹海を出現させ、パラナ、“コーヒー王国”の名をほしいままに発展したが、1960年ごろからの相次ぐ霜害で、コーヒー樹海は相次いで倒され、大豆、小麦、とうもろこし、フェイジョン豆、米など機械化する農作目へ変換していったのである。

4. トレス・バラス地区の開拓

北パラナのトレス・バラス移住地（Assai）は1932年（昭和7）、ブラ拓（ブラジル拓殖組合）が売り出した1万8340アルケール（1アルケールは2.5ha）の土地で、引き続き分譲されたピリアニット（Urai）植民地とともに、著るしく日系人比率の高い入植地である。ロンドリナから西パラナのローランディア、アラポンガス、アプカラーナ、マリンガの諸都市、さらに進んでパラナバイ、ノーバ・エスペランサの地方にも日系農家の開拓は進み、パラナ州はサンパウロ州とならぶ日系人比率の最も高い地域となっていたが、その誘導役は、1930年以後伸びてきたソロカバナ線（サンパウロ州内）から分岐した鉄道の北パラナ線、サンパウロ市に通ずるパラナ・サンタカタリーナ線のパラナ州内での延長であった。トレス・バラスの中心アサイ市は、ロンドリナから東へ48km、北パラナ線のジャタイジンニョ駅から南東28kmにあるトレス・バラス移住地の中心をなす市街地で面積2.5km²、人口1万人（日系人比20%の2,000人）の非農業区を形成している。他方、アサイ地区に属する周辺農村472万km²の玄武岩を母岩とする波状台地で標高550～720m、農村人口1.2万人、（日系人比28%の3,300人）となっているが、1970～80年までの人口推移をみると市街人口が8,600人から1万人に増え、逆に農村人口が2.1万から1.2万へと大幅に減少しているが、わけても日系人口比率が市街地で37%から19%へ、農村では39%から28%へ急減している。

人口減の理由は、霜害被害によるコーヒー栽培の縮小、機械化による穀菽農業への転換など農作業の省力化が、余剰労働と失業を生み、それらの人口は一方では都市域に、他方では農業新開地のマツグロッソや、ロンドニアに移動したものとみられる。

日系人の減少は、子弟に対する父兄の教育熱のはげしさと高学歴指向により、農外の職業に就く人数が増加してきていることに相応している。1981年のアサイ市内の日系人職業をみても、医師12（歯科含）、技師15、弁護士7、判事1、教員・公務員12、をはじめ、工場経営12、商業57で、高学歴と関連するものが多いが、農業では地主、自作が64世帯に達している。アサイ市における日系人の、これ以外のものには、視学官、柔道教師、アナウンサーなどがあり、各種商工の従業員世帯は24（全体381）となっていて、この部分の比率は少ない方に属する。

アサイにおける日系人の混血は極めて少なく、5,246人のなかで8人のみとなっているが、日系人がポルトガル系白人、黒人、メスチソ、ムラートなどとの結婚を嫌う風習は入植当時からあり、

ブラジルの他地域にも共通した特徴になっている。国籍別人口ではブラジル生国籍が4,428と最も多く、日本国籍586、帰化人232人となっている。

アサイの農業者のうち、地主、自作数の最も多かったのは1950～60年代で1,270人に達していたが、日系人はこの半数で、他の部分はポルトガル系ブラジル人であり、農地所有面積では日系が2倍を占めていた。しかし、次第に離農者も増え、1970年では全体の地主層は880世帯ほどに減少している。アサイの総耕地面積は5万ha余であり、1930～40年代はコーヒー樹海といわれたこの地域も、1979～80年には第4表のように大きな変化を遂げた。コーヒーは全体のわずか4.6%、2,300haに落ちこみ、それにかわって棉花が主要作物、大豆、小麦がそれを追う展開となり、上位3種で84%の42,200haにも達していることである。この数字は、最近輪作体系が導入されていることもあって、必ずしも固定的な数字とはいえないが、変化の大きさは目をみはるものがある。トレス・バラス植民時期は大きく①黎明期(1932～41)②戦前・戦中期(1942～45)③戦後期(1946年以後)に別けて考えることができる。

第4表 アサイの主要農産物

種別	植付面積 ha	生産量 (t)	日系生産比 (%) (推定)	作付面積面積比 (%)
棉花	24,000	45,850	80	48.2
粗	425	800	80	0.8
たまねぎ	4,000	14,400	70	8.0
大豆	10,000	14,400	90	19.9
小麦	8,000	10,080	90	15.9
フェイジョン	1,100	830	70	2.2
コーヒー (皮つき)	2,300	3,300	80	4.6
イタリア・ブドウ	148	1,700	100	0.3

<1979～80年 ブラジル地理学院資料で作成>

① 黎明期

トレス・バラスのある北パラナは、パラナパネマ川の西南部で百数十万アルケールの地帯を指し、豊饒な沃土テラローシャ分布地と一致するが、交通の便がなく、20世紀初頭まで森林のまま放置されていた。ブラジル政府は1910年代になって、森林を伐採し、農産物を作付けすれば土地を安価に払い下げするなどの政策展開をおこなったにも拘わらず、わずかの農場が設立したにとどまった。20年代になって、鉄道も次第に奥地に敷設されるに及んで、イギリスのロバート卿が北パラナに400アルケールの土地を購入して先鞭をつけ、20年にはパラナ殖産会社を設立して、拓殖事業をはじめたのである。これは後に「パラナ土地会社」と名称変更し、拓殖事業と鉄道延長事業が併用して進められ、この地域の原住民シャバンテス族の安眠が打ち破られていく。

この地帯は、農作物栽培の強敵サウバ蟻が皆無で、マラリアが少なく、気候温和(最高気温29.6℃、最低気温7.0℃、降水量月75～100mm)、土地豊饒の好条件であったが、日系人の進出が1930年代にずれこんだのは、州政府の払い下げ土地が数千～数万アルケールと広大であり小口分譲の便宜がなかったからであった。同時に日系人の資本力は、当時せいぜい10～20アルケール購入にやっとという状況で、日本人資本家による土地分譲期待の声が次第に強まっていった。

イギリス人経営のパラナ土地会社とともに在日資本家らによる南米土地会社(1万アルケール)、ブラ拓(1万2,500アルケール)、野村合名会社(1,400アルケール)などの土地購入が行われたものの、分譲は遅れがちとなり日系人自作への道は思うように前進しなかった。

1930年は、世界恐慌のあおりでコーヒー輸出が不振化したうえに、ブラジル政変が重なり翌年政府は「在庫珈琲買いあげ、珈琲新樹植付税法」を公布、続いて「珈琲生産州協約確認および新樹植付税、半磅特別税、在荷珈琲買上げ並に処分に関する法令」を公布してサンパウロ州などコーヒー生産地域のコーヒー園拡大を規制した。パラナ州は「珈琲樹5千万本未満の州に対しては、同数に達するまでの制限令の適用を停止する」条項が適用され、新植が可能となったため、サンパウロ方面の日系コーヒーコロノは燎原の火の如く、北パラナに殺到することになったのである。

1932年、日本では5.15事件が勃発した年である。北パラナには600家族、3,000人が入植したが、その70%は請負契約及びコロノ生活者で直来移民は少なく独立農は北パラナ土地会社の

わずかな人々であった。

トレス・バラス移住民の開発着手は1932年で、ブラ拓の“在住邦人に入植させる”方針で土地分譲にあたった。そして権利主張の多い直来移民を拒否しブラジル在住移民に分譲を開始したのである。1929年設立のブラ拓が、バストス、チエテの両移住地でなめた強い権利主張という辛酸をくりかえさないためでもあった。

ブラ拓は、もう！つ重要な提言をしている。開拓入植が、営利を目的とし、生計をたてるだけでなく「愛土、永住」を目的としたガット（Gozar a terra）運動を展開し、育成思想を投入したことである。

「農業は事業ばかりが唯一の目的ではなく生活様式なのだ。あるときは豊かな稔りに感謝し、あるときは凶作の憂目に苦痛の惨と戦う。地上により好ましい生活を求むるならば手頃な土地を有し、ここで働く耕人の生活こそそれであろう。つつましやかと勤勉とは十分な酬を得る。農こそは立派な市民を生み教養を与えるのだ」とする精神訓話を提起し、定着の必要性を説いた。

土地分譲は次のように行れた。

1アルケール（2.5ha）550ミル・レース（労賃1日8ミルレース）、5か年年賦、毎年5分の1支払い、即金は1割引きとする。この方法は、従来の3年据置10か年年賦制に比較してきびしいものであったが、コーヒー不況と棉花栽培の好転、早期植民者の完全独立を目的としたもので、ブラ拓の当初計画は1932年から5か年間に1,000家族、12,500アルケールを分譲するとしていた。

移住地のブラ拓仮事務所が、1932年5月下旬から11月中旬までの事業報告をサンパウロの本部に次のように連絡している。

「9月に至り、二等級地50地区565アルケールを2家族に分譲せり、10月に在住邦人旧家族22人の入植をみとめたのを初めとし、現在、移住地人口は職員、その他を含め19家族64人なり」
「移住者の移住地に対する感想は、稀にみる健康地であることと土地肥沃なのに改めて魅了させられ、交通不便な深山にありながら不満の声は少ない。不焼の新天地に、たまねぎ（25アルケール）、粃（2.7アルケール）、フェイジョン（12.0アルケール）等が採種されているが、いずれもテラ・ローシャに対する試作的なもので、珈琲樹2,500株の植付が終了し、年内に2,000株余が植付けられる見込みなり……………」とある。結果的にはフェイジョン492俵、粃89俵、大豆39俵と少々的小麦がとれただけであった。

農地分譲と同時に計画していた市街地も1等地1,400コント（1コントは1,000クルベイロ）から8等地300コントに分譲して売り出し、この地を旭日（発展を象徴する）アサヒと名づけたが、戦争で敵国民扱いになった日本人に、日本語地名を認めないことから椰子樹の一種アサイと市街地名を改名した。

コーヒーの先行不安、北パラナ土地会社のロンドリナ地方分譲などで、トレス・バラスのその後の売れゆきは必ずしもよくなかった。奥地での交通不便は、運賃、販売税の関係で穀物等1アローバ（15kg）につき、サンパウロ州と比べて6ミルレース安いなどの条件も不振に迫車をかけた。

従って開拓3年目で328アルケール、4年目にして分譲累計3,810アルケール、入植家族95、開拓面積496アルケールにとどまった。

この反省にたって適作物選定、増産体制の確立、商品化過程の研究などの機関として33年トレス・バラス農会が創立する。農会の最初の事業がテラローシャの棉作（エキソプレッソ種）づくりでありこれに成功したことが、小麦（品種ブーザナ3号）、コーヒー（ブルボン種）、フェイジョン（シュンピーニョ種）、たまねぎ（カテテ種）、と次々に適種を発見していくことつながっていった。

コーヒーは定植後、採集、収穫まで3～4年を要するので、その間は、間作として小麦、棉花が作付された。農会はブルボン種を最適として奨励し、35年には栽培農家31戸、樹数17,750株を数えた。米やフェイジョンも農会が推め、自給を満して、移出するなど、入植後3～4年目の成果は、移民の定着と新規移民の導入に大きな効果があった。

35年のトレス・バラス地区の収穫量をみると粃1,993俵、フェイジョン1,239俵、小麦107俵、棉15,414アローバ（15kg = 1アローバ）、たまねぎ596カーロスと発展をみせ、副業的に

家畜の導入、乳肉加工などもはじめている。

ブラ拓のガット運動は、34年には経済団体として産業組合を結成し、指導団体の農会との機能分離と産組で得た余剰金の農会援助の相互補完を結びつけたものとして発足させた。

創立したばかりの産組は、精米所の建設、農産物販売市場の拡大（サンパウロ方面まで）、購買事業を充実させて主食の確保、信用部の設置、外郭に棉花株式会社を設立しての製綿事業への進出など、いわゆる産組事業の拡大で移住地のまとまりある発展を指向したのであった。

ブラ拓は、当時の所有面積の1万2,500アルケールではトレス・バラスの将来の発展には手ぜまとして、隣接のハウエル兄弟所有地6,100アルケールの買収を行い、36年移住地の隣接地であるコンゴニア耕地9,000アルケール（南米企業組合が所有）と合わせて日系人に分譲させていたのである。しかし入植者は当初計画を下まわり、36年実績では1,433アルケールのみで、いぜん好調に転じなかった。

理由は、①に棉作に病虫害が発生したこと、②珈琲の市場値が建たぬ状態が続いていた、③降霜の宣伝が誇大であったこと、④資金力不足などであったが、37年ごろからテラローシャを利用したの土地生産力の高さがわかってから開植は次第に進んだ。

1939年のブラ拓のトレス・バラス農耕地分譲内訳は、270地区、436家族に及び1,480人であったが日系邦人の人口比は930人で36%となっていた。

邦人を含めて、アサイ地区の土地代の完納は1940年で約半数の550戸にとどまった。市街地購入者は221戸中187戸（85%）の完済と成績がよかったが、農耕地は822戸のうち317戸（38%）が、40年までに土地購入費を完納したにすぎない。従って入植者の生活は楽なものではなく、少ない商品作物収入のほか、新規開墾により、伐採される密林の原木が、製材素材としてよい副収入になったほどである。

ブラ拓は、開拓事業（土地売却）だけでなくさまざまな事業を展開していった。1940年の事業内容をもてみると精米所（入庫21,835俵、生産8,533俵）、製粉所（入庫21,540kg、生産288kg）製材所（以下同325,372㎡、262,640㎡）、製珈琲工場（656,402kg、323,500kg）、製棉工場（972,624kg、330,126kg）、のほかに96万kwの発電所による電力供給、950㎡の水道供給、更に、18万枚のレンガ工場をもつなど、開拓当初、開拓入植者と結びついた事業を進めたのであった。

トレス・バラスへの入植は第5表のように1935～37と40～41年にピークがあり、1932年以後10年間でいずれの年も自作農地主（シチアンテ）層がコロノおよび歩合作者を上まわったことはない。

地主とは自作農も含まれるが、全体の2/3に当たる880戸で、コロノなどは1/3の474戸の入植であり、トレス・バラスは、地主、自作層中心に拓殖が進んだ地域に入る。地主層の規模が大きくないことが、コロノや歩合作者の移住者数を少なめにしたということもできる。

② 第二次大戦下のトレス・バラス

母国を敵国にまわした第2次大戦下の在住ブラジル日系人は極めて微妙な立場におかれ、深刻な事態に直面し、苦汁と辛酸をなめさせられる結果となった。

バルガス大統領は、「伯国は米国と共に行動する」と声明を出し、運命の日、1941年12月8日を迎えたのである。

4日後の12月12日、トレス・バラス産業組合と移住地事務所は、法によって受ける統制や圧迫はやむを得ないが、無智なガマラーダの盲動によっておこる不祥事を回避し、敵愾心をおこさせないよう、日系人に通告を出し、平和・平定の再来を待った。このときの文書を掲げて、当時の様

第5表
入植年次別地主、コロノ別家族数と人口

	地主 (シチアンテ)		コロノ及び 歩合作者	
	家族数	人口	家族数	人口
1932	6	20		
33	20	112	2	9
34	45	240	8	39
35	65	404	43	227
36	65	429	40	215
37	106	590	17	131
38	59	161	10	39
39	22	204	4	21
40	353	1,845	266	1,639
41	139	765	84	434
Total	280	4,770	474	2,754

<トレス・バラス移住地資料で作成>

子を伺ってみよう。

「拝啓、貴家益々御多祥の段大賀申上ます。扱て、御承知の通り、時局は増々重大化して参りました。就きまして吾々は、在伯外国人として、又在伯日本人として今後如何なる事態が突発しようとも、飽くまで冷静に、沈着に国法を遵法し、大国民としての襟度を持し、苟も不用意不謹慎なる言動よりして思わざる不祥事を惹起するが如き事なき様、御互に深甚の注意をいたしませう。就きましては左記事項御熟読のうえ、厳守願います。

1. 人前で戦争に関する話をせぬ事。殊に外国人とルア・パール等では絶対にこれを避けること。
2. ブラジル国は、英国側であることを忘れず、彼等を刺激したり、敵愾心を起させたりするが如き言動は慎むこと。
3. 如何なる場合にも、絶対に国法を遵び決して不服や反抗の態度をなさぬこと。
4. 最悪の場合、伯国が参戦するやも知れれず、この戦争は長期に亘る可きことを覚悟しておくこと。
5. 総ての事業は出来るだけ緊縮し、諸事節約をなし、自給自足で行う方針を樹てること。

続いて領事館も告示を出した。そのカガミは「旧曆8日大東亜戦争開始以来、勇猛果敢なる皇軍は、海陸空に亘り各地において赫々たる戦果をあげ、米英両国の大太平洋および東洋艦隊の主力を全滅せしめ、香港、マニラ、グアム、ウェーク、英領ボルネオを占領し、馬来半島及びビルマ方面に於ける戦果も亦赫々たるものあり、「シンガポール」の陥落も目焦の間に迫り居実状にて大東亜共栄圏確立に着々巨歩を進め居るは同慶の至り有之候。……」。として、次のような告示を出した。

1. 伯国法令を遵守し官憲の命令指示に従うこと
2. 邦人の集会、会合はできるだけ之を見あわすこと、
3. 国際政局政治問題および戦局に関しては邦人以外の者とは議論せぬこと
4. 多数集合して「ラジオ」聴取を控えること
5. 戦況等を騰写版、其の他の方法で撒布せざること
6. 非合法的な日本語教育を為さざること
7. 警察官憲の許可なくして武器を携帯せざること

こうした事前の対応にも拘わらず、明けて1942年1月28日、首都リオ・デ・ジャネイロでの汎米外相会議で「即時対日外交の断絶」が宣言され、敵性国人である日独伊3国人に対する取締まりが強化された。

翌日、政治社会保安局から次のような禁令がでたのである。

1. 如何なる者たりとも当該国語にて記された文書を頒布すること。
2. 当該国家を唱し、或は弾奏すること。
3. 当該国独得の敬礼をなすこと。
4. 多人数集合せるところ、或は公開の場所にて当該国語を使用すること。
5. 当該国政府要人の肖像を人の集まる処、或は公衆に展示すること。
6. 保安局より発給する通行免許証なくして一地域より他地域に旅行すること。
7. 私宅内といえども私的祝祭の名義にて集合すること。
8. 公開の場所にて国際時局につき討論あるいは意見の交換をなすこと。
9. 以前に正当な免状を取得しているとも武器を使用すること、又武器弾薬或は爆薬材料或は爆薬製造に使用し得るべきものを売買すること。
10. 保安局に予め通告なくして転居すること。
11. 自己所有の飛行機を使用すること。
12. 保安局より許可さるる特別証なくして空路旅行すること。

不幸にして、トレス・バラス産組や移住地事務所の警告、領事館の告示にみあう規制が保安当局から出され、やがて、ラジオ、印刷機の使用禁止、官憲の日系人監視がいっそう厳しくなり、3月11日には資産凍結令が出される。

1 コント以上の一切の銀行預金、財産的性質の債権、証券、株券の凍結、譲渡の制限など個人の財産にも管理の手が伸び、日本政府関係出資による半官、半民の「ブラ拓」は国策会社とみられ、事実上開拓事業は中止した。

「不動産の接収」「不動産売買禁止」などの流言が流れて、土地分譲代金年賦分の回収が非常に悪くなり、ブラ拓とともに産組も連邦政府の監督下に入っていく。そして組合員の生産物は産組に全出荷を強制されていった。

在住日本人は不測な事態に鑑み、一文でも手元にと土地代金の支払いを躊躇したのである。それに、珈琲の霜害、降雨による棉花の減収、雨期フェイジョンの暴落が続き、農家の経営状況は次第に悪化し、惨状を呈するに至る。

ガソリン統制による運賃高騰で製材用原木や発電所用燃料代が暴落してブラ拓の経営が悪化したのも、日系人に不安材料を与えた。

日系人を更に追い打ちしたのは、官憲によるラジオの接収、アサイーロンドリナ間のバス接収、財産申告の強制、私用自動車使用禁止、43年に入ると、ブラ拓の土地分譲禁止、カボクロによる日本人目当てのピストル乱射で死亡者がでる。水道用鉄管、電機施設の接収、邦人ハッカ工場の焼打ち、天長節日にガラナ工場落成式をやり9名が逮捕収監など、生活面での破壊から生命の危険に結びつく事件も次々おこり、日系人の被害が拡大していった。

44年～45年にかけては、官憲により大半の男性が逮捕され、拘留所に集められたトレス・バラスの人々は、ズボンの下すそをひもで結び、下剤をのまされ糞尿が足もとにある状態で作業をさせられるなど、敵国人としてきびしい運命にさらされたのである。しかし、婦女子、子供に対する拘禁、束縛は、それほど強引なものではなかった。

③ 戦後のトレス・バラス

在伯日本移民は、「1億1心、日本不敗、大東亜共栄圏建設」を確信し、大本営発表の戦果を信じていた折、日本敗戦の報がブラジルの新聞と旅行者の口伝で広まった。ラジオ放送が聴取できない情况下で、戦勝の怪ニュースも何処からともなく日毎廻送されて現地は混乱したのである。東卿外務大臣のメッセージが敗戦を確信させるものであったが、戦勝派の不感益々昂揚した。

戦勝思想の背景は①、例え母国が戦争に負けていたにしても「敗けた」と言動にあらわさないことが日本国民の道義 ②、日本は必ず戦争に勝つ国、敗けたとの報道は嘘だと単純に敗戦認識運動に反抗する ③、敗戦を認識しつつも戦勝を標榜して自己の商売に利用する、などであった。そして勝ち組、負け組の骨肉をけずる争いが続いたが、確かな情報の入手と、ブラジル人の日本人管理地の土地買収対応などで、日系人の団結が必要となり、勝ち組、負け組問題は自然解消の方途に向った。

財産凍結令のなかであって基本財産がブラジル人の手にわたる可能性が迫っていたが、各区に日系ブラジル人による農友会を合法的に結成し、地権の取得をいち早く行って、用地の接収や買収をうまくめかされていった点、同じ敗戦の憂目にあったアメリカ合衆国の日本人移民とは違っていた。

日本の敗戦が確認されると、トレス・バラスの人々の日本に錦を飾る帰国の夢はとだえた。敗戦国には帰れない、この地に骨を埋める覚悟がそれぞれの移住者の胸のなかで確固たるものとなった。永住を前提とした農業への取り組み、生活がはじまったのである。

1956年にはアサイ農村協会を誕生させて、農産物最低価格保証の運動、農業、肥料の購入、諸倉庫の建設と行い、農民大会を主催して運動の母体となった。また1951年2月にはアサイ市会をつくり、市街地の発展、住民の厚生、慰安・保安に対する提言機関として機能させた。電話、電燈、水道、郵便局、学校、消防などの設置、増設拡大、機能化に向けて運動し、成果を生んでいった。こうしたアクティブな活動は、不転で永住を覚悟したからこそ結実したものであった。

1957年9月日本人会の調査によると、アサイの農耕地帯と市街地の在住者は第6表のようになっていた。

当時一世帯当りの家族構成は農耕地邦人9.3人（伯人6.3）、アサイ市街地在住7.5人（伯人6.3人）で、邦人の家族は規模が大きかった。日本人および日系人の地主比率（自作を含む）は

農耕地帯で80%、97%と多く、市街地でも73%、67%と、伯人その他の民族と比べ、高率なのが目立っていて、コロノ数は非常に少ない。

「家族構成のよいものは早く成功する」という言葉があるが、農業を拡大していく過程で家長、長男が経営の主管者、二、三男は家内労働者として経営の一部を分担する。婦女子、老人は農作業の補助者であり、生活維持目的作業に従事するなど機能分担されていた場合が多い。

戦前の家父長制、長男優位、男子優先の思想が維持され、子供達が結婚後も一つの農場に血縁関係をもって従事することは成功への最短路にあり、また伯人が一般に結婚とともに分離家族となって生産の場を異にするのとは対照的であった。

農業生産面での収益状況はどうであったか。1956～57年の調査によると、アサイ（トレス・バラス）の生産順位は、珈琲が第1位で全農産物生産額の45%の1.7億クルゼイロ（栽培面積8,100アルケール、樹数1,120万本）、次に棉が31%の1.2億クルゼイロ（6,200アルケール）、第3位は14%のフェイジョンが5,300クルゼイロ（3,500アルケール）となっており、この三大農産物は生産額では90%、栽培面積で82%と他を圧倒していた。4位以下は、畜産物、杣、ミーリョ（とうもろこし）、その他が続いていた。その意味で、この段階は、コーヒーを主軸にしたモノカルチュア化が進んでいったと考えることができる。

第7表で1933年以後、25年間のアサイにおける主要農産物の生産推移を掲げたが、これによると、コーヒーに大変なバラつきがあるものの、戦前は杣、コーヒー、棉、フェイジョンの四大作物が基幹をなし、戦後も、基本的にはこの構造を維持してきたが、1970年代から変化し、前記2表のように、棉花中心、大豆、小麦、玉蜀黍がこれを補完して、杣、コーヒー、フェイジョンの作物が大きく後退していることに気付くのである。

コーヒー減収の理由は、相次ぐ降霜による葉ぐされと、労賃の上昇によるコストアップ、機械化の困難性がある。杣は、灌漑が不十分で陸稲が多く、単収が東南アジアの低生産地帯以下で、収益があがらないことで敬遠されているが、日本人の伝統的主食として、コーヒーの間作などに播種されている。フェイジョンは、天候不良、虫害に弱く、かつ国際市場をみるとフェイジョンを基礎食糧とする国が少なく、需要が限られていることから、ブラジル最大の生産州パラナでも減収の傾向にある。

第6表
アサイ移住地家族人口構成 (1957 9. 30)

地 帯	国 籍	家 族 数		合 計	地主比率
		地 主	コロノ		
農耕地帯	日本人	617	153	771	80%
	日系人	84	3	87	97%
	伯人他	632	2,663	3,295	19%
	計	1,333	2,820	4,153	32%
市街在住	日本人	286	106	392	73%
	日系人	35	17	52	67%
	伯人他	493	361	854	58%
	計	814	484	1,298	63%
合 計		2,147	3,304	5,451	39%
日本人比		42%	7.8%	21.3%	
日系人比		5.5%	0.6%	2.5%	

<トレス・バラス移住地資料より作成>

第7表 トレス・バラス移住地主要農産高推移 (1933~57)

年	粳	棉	珈 琲	フェイジョン	玉 蜀 黍
	(俵)	(アローバ)	(俵)	(俵)	(カーロ)
1933	87.6	—	—	235	26.5
34	1,819.5	13,929	—	1,200	502.5
35	1,999.5	15,414	—	1,239	600.
36	1,590.5	32,217	25.	2,518	496.8
37	4,320.0	104,927	48.	8,860	1,270.
38	9,354.0	110,848	3,490.	8,214	1,544.
39	17,047.0	146,755	17,681.	16,175	2,170.
40	13,874.0	197,015	55,599.	29,134	3,533.
41	25,557.0	420,000	67,119.	36,000	4,500.
42	55,400	850,000	255,000	42,000	27,500
45	28,000	500,000	100,000	35,000	50,000
47	55,000	850,000	155,000	35,000	50,000
48	35,000	856,000	266,000	63,000	35,000
49	30,000	1,010,000	340,000	80,000	20,000
50	88,000	660,000	355,000	90,600	165,000
51	45,000	1,200,000	300,000	80,000	60,000
52	25,000	1,420,000	600,000	77,000	25,000
53	12,500	780,000	275,000	82,000	7,500
54	47,500	1,810,000	2,250	195,000	175,000
55	16,300	894,000	126,000	45,300	99,600
56	22,000	1,445,000	19,500	106,000	143,565
57	15,000	682,000	215,000	95,000	22,000

<トレス・バラス移住地資料と移住50年史で作成>

④ 移住区の概要

次にトレス・バラス移住区を第1図でみて、簡単に特色を記すことにする。(第1図)

南西のグルカシア地区は1935年、福島県の藤田千代治氏が80アルケールを購入し、同郷の人々によって開植したところである。第2次大戦後は外国移民の集団化が禁止され、ブラ拓はグルカイヤだけでなく、ジャンガータ、ロセイラの北部地区の一部を伯人希望者にも解放したため、1949年までに日系15家族、伯人100家族で構成されるトレス・バラスでは特異地域となった。この地は、アグア・ボニータ河が中心を西流していて、1962年まではコーヒー栽培が主体であったが、62~70年には棉とフェイジョンが、そして70年以降は大豆、小麦が主要作物となったのである。

グルカシアの南セボロン地区は、リモエイラ川とジャタイジンニョ河の西流する地域にあり、1935年に開植された。1960年に邦人102人、日系人283人を数えたが1981年には不在地主13、人口も113人と1/3以下に減少した。肥沃なテラローシャ地帯にあって棉作が群を抜いて多い地域で日系人の所有地が573アルケールと全体の66%を占めている。

東部のロセイラは標高500~600mあり、1936年熊本県人らの開植である。大豆、小麦の作付が720アルケールで、他に10アルケールほどイタリアブドウが栽培されている。こゝは日系以外の所有地が1,880アルケールに及び、不在地主も多い。

もともとコーヒー栽培が中心で開拓されてきたが、霜害で1953年ごろから棉作と有畜に転向した。セボロン区とともに移住地最大の棉作地である。

北部のジャンガータは1937年、石川県からの入植者によって開植された。この地区は1940~50年にかけてはコーヒー色、50~70年には棉、米、フェイジョンの三大作、そして70~80年にかけて大豆と棉の二大作物によって特色づけられる。1953~55年地区の棉花生産量500万アローバで一地区生産量としてはブラジルを記録したのである。

南東部、トレス・バラス川に沿うアモレイラ区は1938年、北海道、富山、山形県の移住者が入植した標高600~700mの台地で、他地区と同じように1953年まではコーヒー主力、53年の降霜から棉作、70年からは大豆と小麦が主力になっている。81年の区内の植付面積をみると、大豆が1,961アルケール(伯人分も含む)で多く、棉花が1,239アルケール、ミーリョ(とうもろこし)920アルケール、コーヒー408アルケールと続いており大豆は17万俵(60kg俵)、棉花38万アローバ(1アローバ15kg)、ミーリョ14万俵(60kg)、コーヒー(皮付)、4.4万俵(45kg俵)そして小麦が12万俵(60kg)であるが、その他にはフェイジョン、マモーナ(ヒマ)、イタリアブドウがわずかある程度である。

北東部のセードロはどうか。開植は1940年とグルカシア区あたりから比較すると5年ほど遅い。池田栄太郎ら4人が草分けとなっているが出身地はわからない。標高700mの台地で東部にチーグレ河が流れている。農業の推移をみると1940~62年がコーヒー、63年以後棉作へと、他地域に比べ棉作移行が10年ほど遅れている。コーヒー樹霜害が比較的少なかったのと入植が新しいことによっている。

年次別作付面積は1958~63年にかけてコーヒー80%、雑作20%(以下同様)63から66年は60%、40%、66~70年50%、50%、70~75年40%、60%75~80年20%、80%となり、1958年~63年のころから約20年余でコーヒーと雑作の比が逆転している。ここにも北パラナのコーヒー後退の推移を伺うことができよう。

南部のパイネイラ区もセードロと同じで1940年の開植である。福井県、香川県人による入植で開かれた。日本人、日系人家族は、52年の67から59年の54、64年の51、81年の34と減少の傾向にあるが農業推移は資料に乏しくよくわからない。

サンタ・セシリアは、現在ブラジル在住北海道人会アサイ支部長である荒沢鉄夫氏らが、戦後の1948年、土地を購入して開植した地である。

1967年段階でコーヒー樹18万本、棉600アルケール、米160アルケールが主要であったが、ここでもコーヒーは激減し、大豆、小麦、棉が抬頭している。

こうしてみると、トレス・バラスにおける開植以来の土地利用変化は、地区ごとに分析しても

共通性が強く、北パラナの農業地帯の変化とも相応しているといえる。

5. 日系ファゼンダの事例分析

藤田千代治氏は、福島県白川郡東村の出身で1931年（昭6）10月ブエノス丸で渡伯した。最初はサンパウロ州の伯系ファゼンダで4年余の間コロノとして働き、その時貯えた資金で1935年6月トレス・バレス移住地のグルカイア区に80アルケール（1アルケールは2.5 ha）を購入して開拓したが、同年の開植組には、同郷出身の八代、山内、根本兄弟と我妻らがいた。

グルカイア地区は、アサイ市街地から南々西に約4 kmほどはなれたテラローシャ地帯（玄武岩が崩壊した赤紫色土）にあり、中央をチバージ河の支流、アグア・ボニータ川が貫流している肥沃土地で、面積は約1,000アルケールあり、1981年の日本人、日系人家族は10、そして73人の入植地である。

グルカイア区は、1962年頃までは一面コーヒー樹海であったが、その後70年までは棉花とフェイジョン豆が抬頭し、1970年以後は大豆、小麦の雑作が中心になるなど、土地利用での変化は、パラナ農業の変貌に、ほぼ相応してきている。

藤田氏は、まずグルカイア区の北西にあたる366～369番の4区割を購入し、続いて隣接の北域363～365番の3区割を増地した。（第2図）

最初の購入地は1935年6月入植時の150 ha、次いで48年、グルカイア区西端のチバジ河に沿う200 haの第2耕地を手中にし、64年には第3耕地200 ha、68年に、第4耕地250 ha、70年に第5耕地150 ha、そして71年には第6耕地75 haと合計この地区で1,075 haの中堅ファゼンデイロの地位を占めるほどに着実に農場規模を拡大した。加えて、1981年になると長男、次男、娘婿の名義で、アマゾニア地域に8,700 haという広大な地積を購入したのである。

当初からコーヒー作中心の農業生産体系を進めたが、相次ぐ降霜と早魃の被害で、1962年ごろから棉作を導入している。

1965年の土地利用図をみると、北域のペローバ川沿いは水田にし、灌漑用水路をもうけて土地生産力を高めた。隣接の南方は棉作地、そして鶏舎、倉庫、コーヒー乾燥地などの加工センター地帯の南側はコーヒー樹園を抜根し、棉作地と牧場を配置させ、南端地域はコーヒー樹をそのまま残している。（第3、第4図）

65年段階の第一耕地では、棉作地42 haとコーヒー園35 ha、水田17 ha、牧場20 haと主要4作物で76%の114 haを占め、他は果樹園、原始林となっている。設備地域としては鶏舎2 ha、豚舎2 ha、宅地3 ha、コロノ住宅4 ha、それに道路が5 haとなっていて、広大な土地を施設に附帯させていることがわかる。

コロノ住宅は、棉作地に4戸、管理地周辺に27戸、東部の雑作地に7戸、南部のコーヒー園区に5戸と合計43戸を建設し、自らの住宅は管理地の中心に配置している。南方のコーヒー園は1965年をもって終末年となっていて抜根のうえ、雑作地に転作した。コロノ住宅は平均4～5戸（建坪は40～50 m²）を1つの集団として、その周辺は、わずかばかりの余作地を設け、自給用畑作物の栽培を許している。ファゼンダによっては、このようにコロノ住宅と余作地を分散させず、管理者のアドミンスタドルを中心とした集中配置をとっているところが多いが、こちらは圃場の手早い管理と人員輸送に関する時間と費用の節減に役立つ配置といえよう。ファゼンダ内に教会をもつ農場は多く、日曜日はコロノの礼拝用として利用しているが、その隣地のグルカイア区州立小学校では、日本語教育も行われてきた経過がある。（1953～58年は日本語校）フジタ、ファゼンダの周辺地域は日系人の入植地が多く、1965年段階ではコーヒー樹作中心の小規模シチアンテ（自作農）が耕地を保有し伯系人地は少ない。

ところが、16年後の1981年の土地利用変化は次のようになっている。（第5、第6図）

第1耕地でのコーヒー園はわずかを除いて姿を消し、かわって大豆、とうもろこし、小麦など

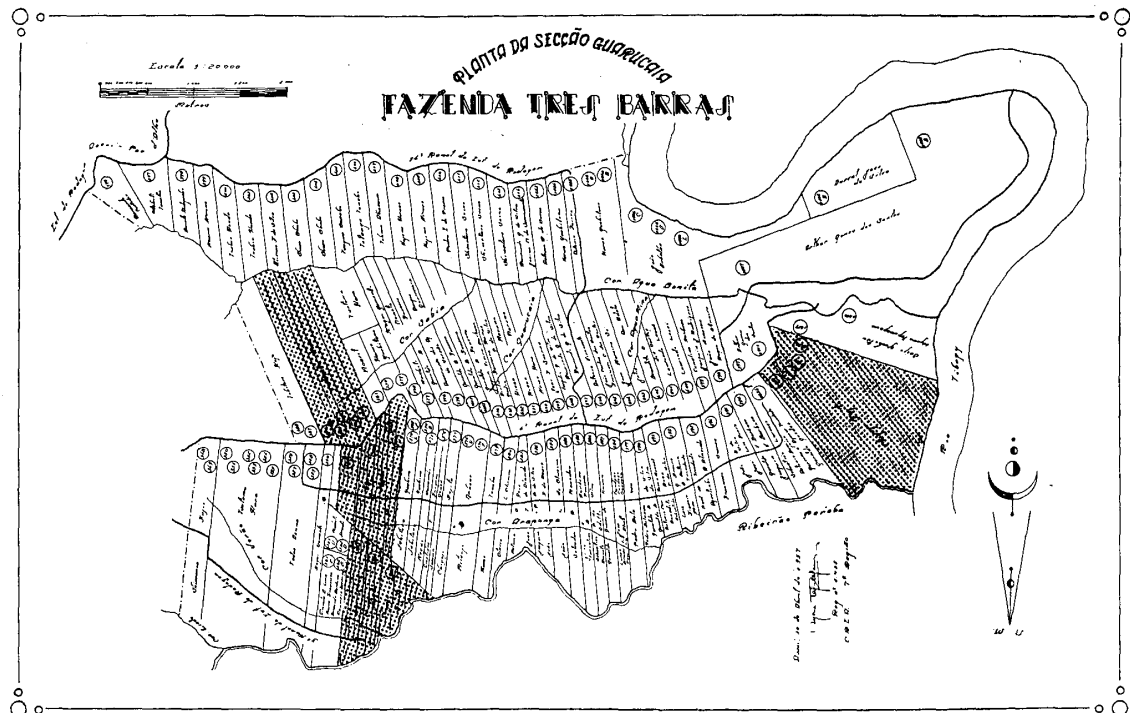
の雑作、ペカン園のほか牧牛用農場が広汎に展開するようになり、棉花栽培は第2耕地(第6図)ほかで作付するようになったのである。

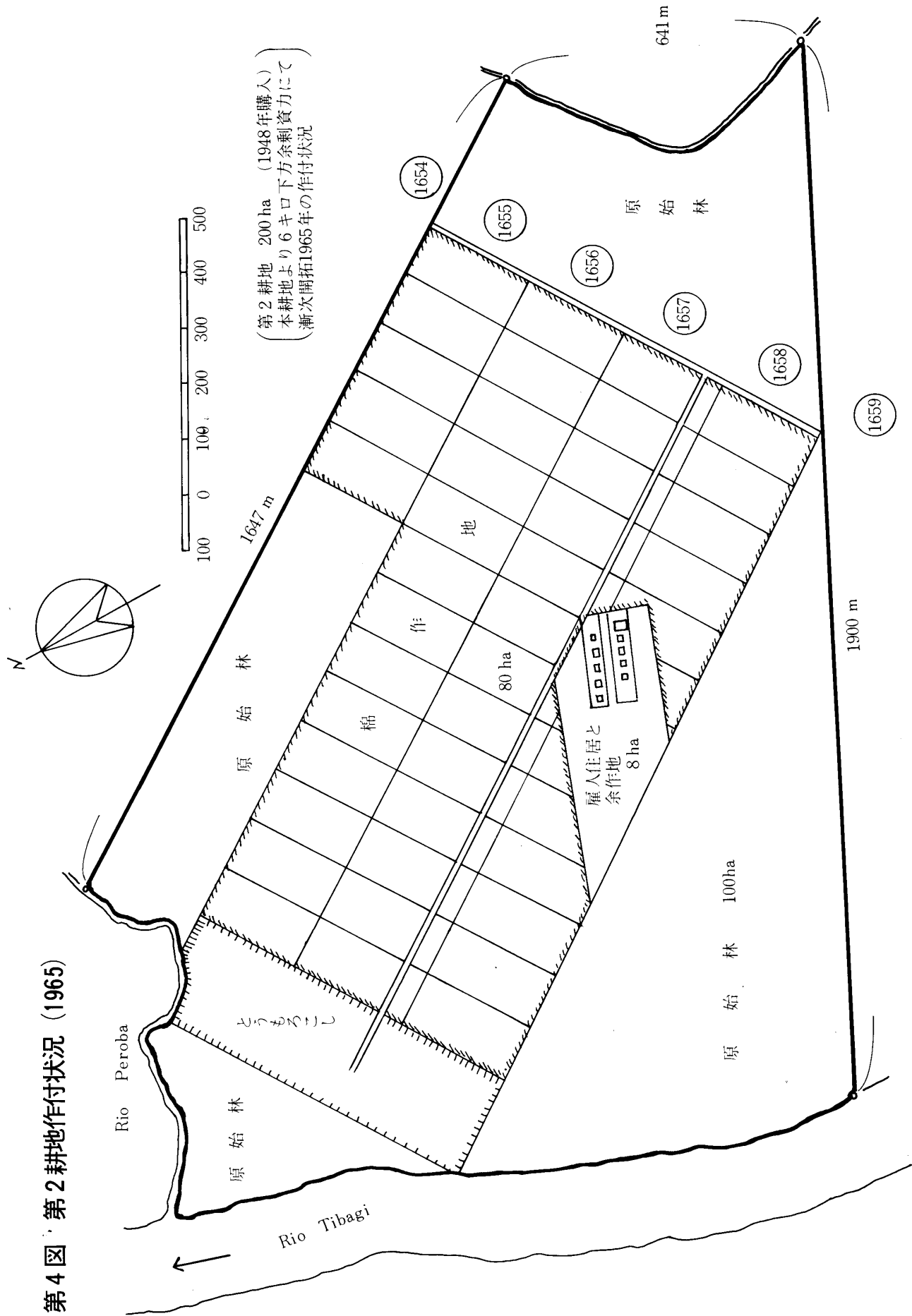
養鶏1万羽、養豚500頭、肉牛600頭(毎年250~300頭生れる)を飼育する畜産業と機械化による雑作は、コロノ住宅の周辺、遠隔地配置を一掃した。コーヒーから雑作への転換は、降霜災害やコーヒー国際価格変動の著しいことによる経営の不安定性のみでなく、収穫作業がいぜんとして機械化できず、労働投下量が多いこと、加えて人件費の高騰、労働条件の向上で、労働コスト占有率が経営費のなかで高まっていることに対応したものである。

第7図で理解しうるように、近年の労賃構成はノルマ給主体の日給労働者(日雇)が上昇傾向にあり、逆に、月給労働者(常雇)の賃金は下降線で推移している。この図はアサイのものでなく、 Rondônia地方の平均数値であるが、アサイでもほぼ照応していると考えられる。1978年7月を100としてあるが、賃金は1982年8月の日給540~680クルセイロ、月給は1万9000クルセイロ程度である。労働者としては、日曜全休、土曜半ドン、1日8時間労働の常雇を願うが、使用者側は、監視の目が行き届かないのと作業を怠惰するラテン系の労働者には、ノルマ主体の日雇制を導入して、出来高払いにした方が有利との見地にたつて、日雇の雇用量を増大させてきている。(第7図)

雇用労働者は、一般に20アルケール所有の場合、棉花、コーヒーのように手間のかかる仕事で常雇4~5人(1~2家族、12才未満は労働者として働かせることができず、12才以上は大人と同じ)で、棉花の収穫期には12~14人の臨時雇用(日雇)を必要とする。月給を支払う場合、雨、その他で作業中止の日があっても支払うことが義務づけられ、その日当を差引くことはできない。月給制で採用する労働者は、農場のなかに40~50㎡の木造住宅を建て、余作地を与える必要があり、家賃は、最低給与の20%以下としなければいけないことも法制化された。電機・水道の設備もしなければならない。労働者はノルデステ(北方)地方からの家族、夫婦、単身者などカボクロといわれる混血やカフーズ(サンボ)、メスチーソが多く、インディオもいる。勿論、月給制で使役する労働力に対してコロノ住宅を与えている場合も少なくないが、藤田農場の場合、年とともにコロノ住宅を減らしている。

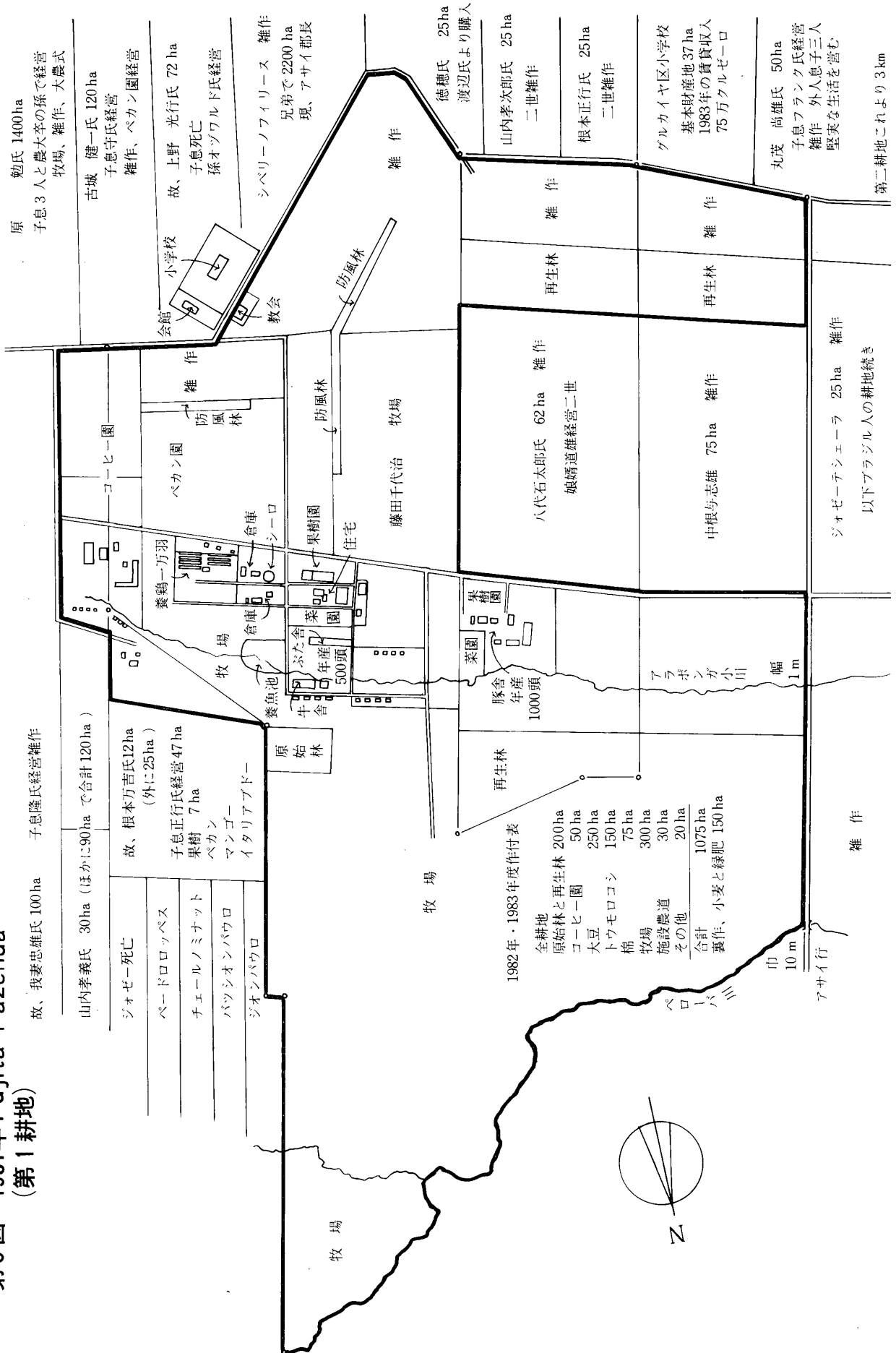
第2図 フジタ農場の位置図(グルカイア地区のみ)

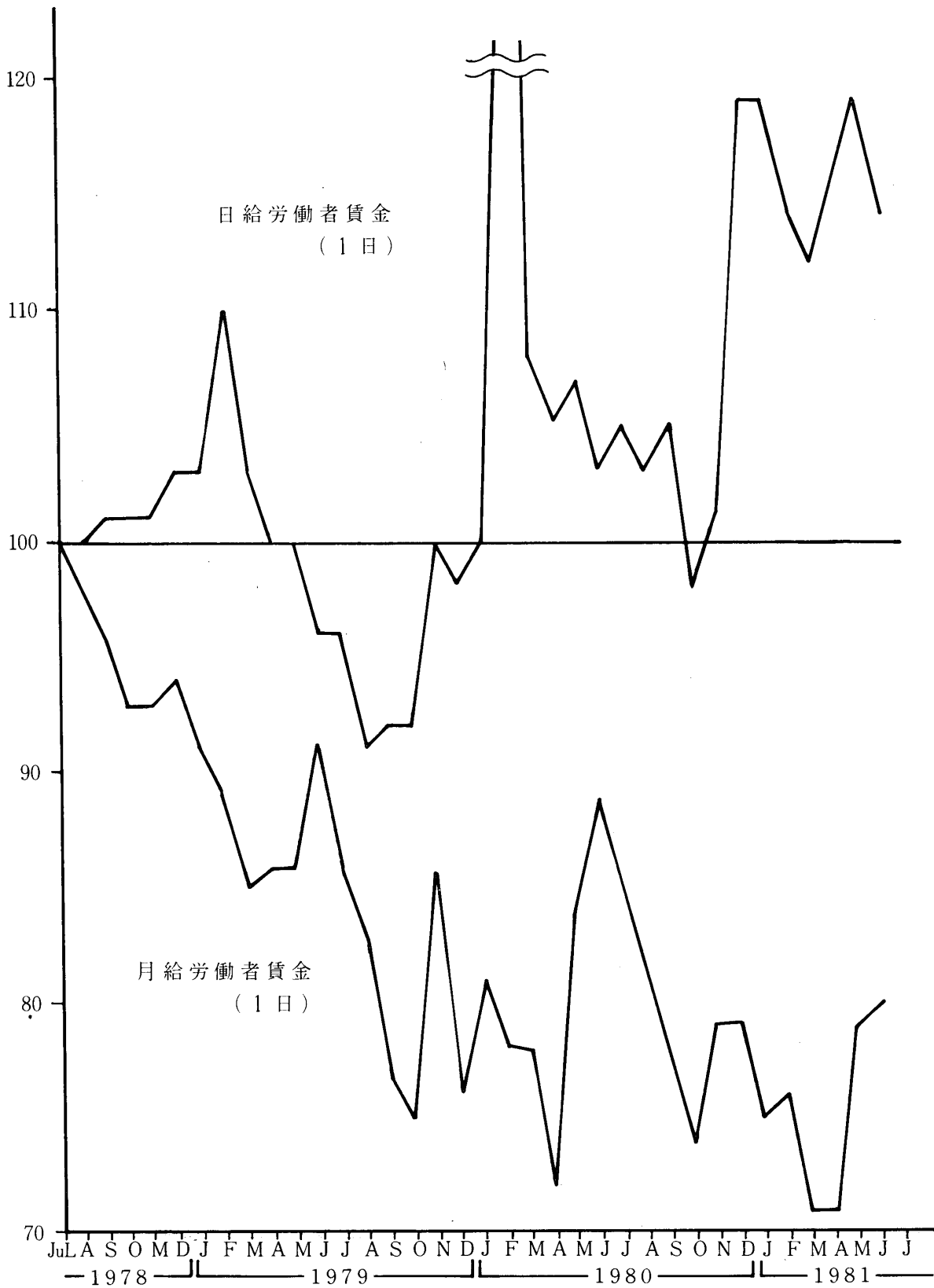




第4図 第2耕地作付状況 (1965)

第5図 1981年 Fujita Fazenda (第1耕地)





1978年7月=100

農務省ロンドリナ支所資料で作成

フジタ・ファゼンダの1982年～83年にかけての所有地（第1～第6耕地）の土地利用状況を見ると、牧場300haと大豆250haの二大土地利用が過半を占め、とうもろこし150ha、棉花75ha、コーヒー園50haと続き、他は原生林、再生林が200ha、施設地、農道など50haの合計1,075haが、利用実態である。冬期間の裏作利用は小麦と緑肥用作物が合計して150haあるので、山林、施設地、その他を除く農用地利用の総面積は975haということになる。

なお、グルカシア地区北西端の第2耕地は、1948年、4区割分を買収した。

1965年段階で200haが棉作地、80haがとうもろこし栽培、コロノ住宅10戸と余作地、含めて10haで、他の100haほどは原始林地帯になっていたが、1982年にかけては、その大部分が開墾され、一部再生林となった。

開墾された部分も含め、棉花、大豆、米、とうもろこし、フェイジョンのほかに裏作に小麦と緑肥用作物を取り入れて輪作体系を導入、地力の維持に努めながら、近代的な機械化と化学肥料多投の新農法がとられている。

藤田氏が畜産、わけても肉牛の育成に力を注いでいるのは、ブラジルにおける牛肉不足による肉価高騰と比較的労働投下量が少ないからである。とはいっても、ミナスやゴヤス、マツト・グロッソのようなセラード地域での粗放的放牧ではない。肉牛種はネローレとジス・オランダのかけ合わせによる雑種で、乳・肉兼用であるが、利用上からは乳牛率がほんのわずかで、ほとんどが肉種としている。

毎年250～300頭を繁殖させ、18か月目まで育成するが、この間は主として放牧であり、飼料畑と天然牧野を利用している。その後4～5か月を肥育期間として舎飼し、配合飼料を毎日30kg～50kg給餌し、1日1kg程度の増肉を行う。勿論、その間、稲料系牧草コロニアオやつる性牧草であるアフリカナも混ぜて粗飼料とするが、この粗飼料は内給である。

牧草は、禾本料と豆科を混播するが、一度播種すると10年間は更新しないのが一般的で1年間に2～3回刈り取る。1アルケール当りの収穫量は50t程度とれるが、最近では化学肥料の投下も行われはじめ増量が見込まれる。

牧草の収穫に関してはオランダ系ブラジル産の刈りとりコンバインを使うなど、機械処理をすすめている。そして肉牛放牧は1アルケール5頭ほどの飼養が可能であり、現在は600頭の牛を100アルケールの土地においている。だが100頭程度の肥育牛は舎飼としているから実質は500頭が放牧されていることになる。

1907年生れの藤田千代治氏は、既に現役を引退しており、妻のコヨさんとともにアサイ市街地に豪邸を建築して余生を送っている。ファゼンデイロは息子のてつお氏が引き継いでいる。そして、二世てつお氏は日系エレナ夫人との間にノエミア、スーニア、ミルトンの1男2女の三世をもうけ、父親千代治氏とともにアサイに住んでこの土地だけでも1,000haを越える6つの耕地の農場主となっている。

アサイで聞き取り調査による、他の日系入植者についても若干述べておきたい。

滝川出身の二世島田正雄氏は、商業を営むかたわら、アサイに200アルケールの農場をもって豆、小麦、とうもろこし、棉作を行い、ミナス・ゼライスに1,300アルケール、マツト・グロッソに600アルケールの土地を確保して牧場を経営している。3世の正信氏は1980年北大農学部で1か年留学し、食用作物の研究を行った。

日系の島田氏はブラジルから250kmほどのところに1970年元個人のファゼンダ1300アルケールの土地を買収したが、1アルケールで10万クルゼイロ（10万円）の良好な土地であり、（その後、マツトグロッソにも600アルケールを買った）、アサイの土地が1アルケール130万クルゼイロに比較して非常に安価である。現在は野草地としてあるが、水さえあればスイカその他の果樹、野菜の生産は可能だという。同じく滝川出身の二世、島田常政氏は6年前に訪日し、約2か月間、北海道の農業地域を見学、研修したが、氏の感想は“日本の農民は負債にあえいでいる。労働の投下量も非常に多い。雇用している人々にきれいな仕事を依頼し、汚れた、また重労働”

働はすべて農家の人々の手で担われている。ブラジルのファゼンデイロやシチアンテには考えられないことである”という。

札幌、藤野出身の西村茂氏は、1925年ブラジルに移住したが 2年間はサンパウロでコロノをやり、3年目に契約移民でトレス・バレスに移り、1935年には市街地にて洋服業を30年余やってきた。その後家族はサンパウロに出でしまっている。

標茶出身の星野正彦氏は、アサイに320アルケールの土地をもって、大豆、小麦を栽培するシチアンテである。日高出身の中山氏は150アルケールの土地を所有し、同様の農業をやっている。

農場経営者が一様に認識していることは、テラローシャと化学肥料の関係である。

これまで北パラナの赤土地帯は40～50年の単位で、無肥料農法を展開した。以前は10年に1回のコーヒー霜害が、近年では3～5年に1回、さらに隔年と頻度が早まっているが、このことが地力の低下と無関係とは思われないとの見方もできるほどである。

1950年の後半から化学肥料の施肥を行ってきているが、無肥料略奪農業地帯との間に大きな生産性格差が生じ、70年ごろから本格的化学肥料投下時代を迎える。コーヒー以外の小麦、大豆、棉花に関しても効果は抜群でありそのことを反映してアサイ市街に肥料商が次々とできたのである。

その結果、1アルケール当りの収穫量は、小麦で500～600kg（80俵～100俵、1俵<60kg>3,200クルゼイロ）、大豆600kg（100俵、1俵60kgで2,100クルゼイロ）、コーヒー400kg（100俵、1俵40kgで5,000クルゼイロ）、棉花400～500アローバ（1アローバ15kgで1,000クルゼイロ）増収した。もう一つ指摘できるのは、従来、農産物が個人、仲買人による消流となっていて、1時的に有利のようにみえても、結局は不利になるとう構造を改めるために、産業組合強化の方向が打ち出され、購買、販売に関して2～5%の手数料をとって販路の拡大に努めている。産業組合は、これ以外に牛乳加工、信用、指導事業および娯楽を主催するなど農村における多面的センターの役割を強めている。

米1俵7,000クルゼイロ（約7,000円）<日本は約2万円>、労賃が1日500～600クルゼイロ（日本は約4,000円）と農産物価格に比べて、労賃コストが格安な地域であり、かつ、不定期な労働力も含めて労働力事情に恵まれているアサイである。たいていのうちでは女中の1人や2人をおくが、その人々の給与もせいぜい月1～1.5万クルゼイロでしかない。

コーヒー・コロノは一般に6か年契約、コーヒーを植えて3年目から結実するので、その間は、間作で食いつなぎ、あと3年はコーヒー豆の収入がある。そして6年後には他の農場に移らなければならない。その間貯えた金でシチアンテの生活に移行した人々もアサイには多い。

最後にアサイの市街地について概括する。トレス・バラス移住地への日本人入植は1932年5月1日を“開拓記念日”としている。

アサイへの入植者の最も多かったのは1933～4年頃であり、日本人比率の最も高かったのは1957年の1,900人である。大半の人々が10から20アルケールほどの土地を買い、開墾してコーヒー樹を植えて生活していたが、1960年ごろより離農者が増えはじめた。その人々は、現住地を売りマツト・グロツツやミナス・ゼライスなど中西部ないし南東部の広大な土地を求めて移動し、さらに、サンパウロやリオ・デ・ジャネイロの大都市、クリチバやロンドリナの中都市に出ていった。また、アサイの市街地に移り、都市型職業に転じた人々も多く出て、農村人口は次第に減ったのである。離農跡耕地は、主として日系人が買とり、増地に役立てた。従って前記のように、日系人の農用地所有は100アルケール以上の人が増え、入植時の面影は次第に薄れたのである。アサイの周辺地域には、1932年以前からポルトガル、スペイン、ドイツ、イタリア、トルコ人などの移住地ができていた。そのなかでも、やゝ北に位置するウライは日系人比率の高い入植地となっている。

アサイ市街は第8、9図のようになっている。面積わずか2.5km²の商店街と住宅地から成る街で、戸数は2,367戸であるが日系人（男922、女984）が住んでいるにすぎない。日本で

いう市のイメージはないのである。そのなかにあって日本国籍 138 人、帰化人59人、そして伯国生れが1,709人で、全市人口5,246人のうち32.6%を占めている。

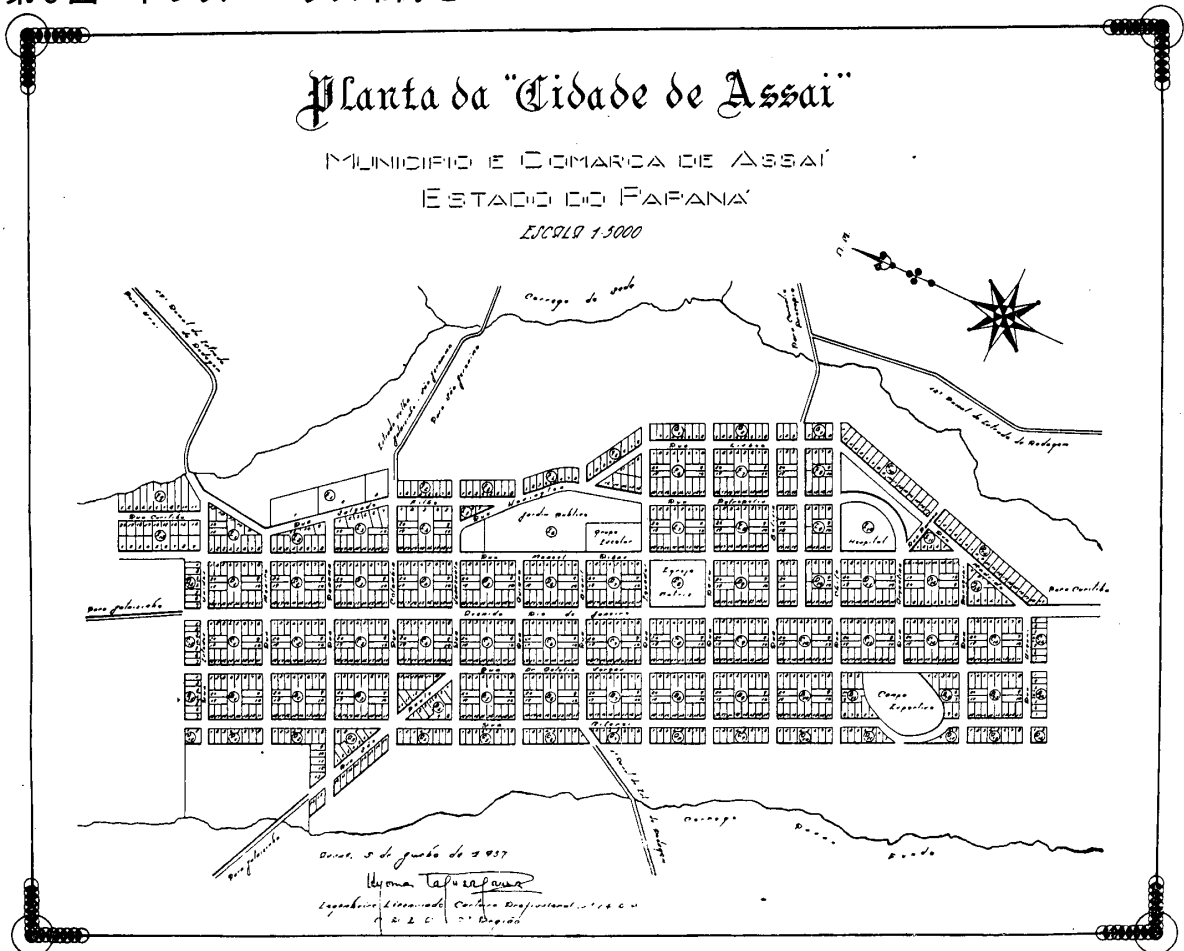
市街地は、基本ブロックは1区割20戸分の構成である。市街の中心を Rondrina から ジャタイジンヤ 経由 クリチバ 方面への国道が通り、市街地を2分している。(第9図)

市では、弁護士の森本氏、郡役所土木会長の農林協会長で郡役所衛生局長の佐々木氏、郡長の喜屋武氏ら20人余が市街地道路で筆者を待ち受け、歓迎会を催してくれたが、そのあと公民館での座談会を企画し、様々な入植の歴史的経過と今日のアサイの様子を以上のように語ってくれた。

肥料商、農薬商を営む佐々木氏、建築工場を経営する酒井氏、銀行員の古屋氏、貸家業の西村氏、ラジオ店を営む島田氏らのほかにこの町の日系人として医師6、弁護士7、歯科医6、判事1(過去1)市議5があり、第14代市長は日系から初の野々村氏、そして市会議長も日系人であった。さらに市街地の職業をみると工業関係31、協会10、寺7、薬局5 銀行6などが主なものである。アサイ出身の知名人としては小倉パラナ総合大工学部教授 熊谷師範学校長(女性)、2人の連邦議会議員、5人の判事などをあげることができる。北海道人会々長の荒沢氏(79才)は12人の子供のほとんどがアサイを去り、いまは旅行と保険の仕事をやリ老夫婦2人の生活をしているが、氏の言によると、アサイの北海道出身者は50家族、そのうち45世帯は農業を営むシチアンテで、雇われ者はない、5世帯が市街地で非農業であるという。

市街地には、日本式の寺が建立され、大鐘が吊してある。郊外には日系人中心の墓地が、既にトレス・バラスの土になることを決めた人々によって立派につくられているのである。

第9図 トレス・バラス市街地の位置図



6. アサイ日系社会の人々と思想、文化

アサイ集落(トレス・バラス移住地)の形成は1930年代からはじまるので、1982年でようやく50周年を迎えた若い集落である。サンパウロ州など沿海地域の日系会社は既に70年の歴史をもっているが、アサイ在住者のなかには1910年代に渡伯し、サンパウロ州でコーヒーコロノを経験した人々が多い。

「4～5年したら金を儲けて日本に帰る」を目的とした移民は“悲願錦衣帰国”を心の支えとして、60日船にゆられ、海を渡ったのである。かつての北海道移民の一部にもそうした考えがあったように、出稼移民にとっての渡伯生活は、仮住いそのものであり、子供達に日本語教育は授けても、ポルトガル語を修得する必要は感じていなかった。半分木片葺、半分椰子葉で屋根をふいた囲いのない小屋住い、空缶の食器、手製の丸太腰掛、とうもろこし粉の主食など生活の貧しさと人跡未踏の原始林の開拓は、筆舌に記しがたいものがあったが、帰国を夢みてこそ労苦にはげんだのであった。

第二次大戦は、ブラジルが日本に宣戦を布告し、アメリカ合衆国と同盟関係を結んだため、在伯日本人は敵国人として、嚴重な取締下におかれ、日本語教育は中止、ピストル、本、レコード、ラジオ、新聞、雑誌は没収、資産凍結、旅行中止など拘束されていたが、“日本は勝つ”“戦争が終わったら帰国できる”を確信して日系人達は働き続けたのである。

祖国の敗戦は、アサイの人々だけでなく、全渡伯日本人にとって茫然自失をもたらし、絶望感が支配して、帰国の夢はたたれ、永住を覚悟させる結果を招いた。

一世から二世の時代へと変った時期でもあり、仏教徒の多い日系人からカトリック信者の比率が急速に増えていった。墓をもたないのは母国に帰る精神的支えであったが、渡伯人の墓地が次々とでき、それも次第にカトリック調の墓が目立つようになる。ブラジルの土になることを覚悟させたのであった。

日主伯従教育は 伯主日従教育に変わり、ブラジル同化が進んだ。二世で日本語はしゃべるが、読み書きができない層が拡大した。

戦前、一世を三角形の底辺とした日系コロニア社会は、漸く、二世中心の菱形社会へと推移し、日本語のほとんど通じない三世社会へと変化しているのである。

日系ブラジル人は、ブラジルの国籍を有し多くの面でブラジル文化を享有する立派な伯国人である。しかし 形質的には二、三世に及んでも雑婚(白人、黒人、メスチソ ムラート、サンボ)が進まない限り いわゆる“ジャポネーズ”とブラジル社会には映じ、また日系人もそれを意識する。一世～二世の世代は大和魂の血液の分散をおそれ、文化的には複族国の仲間入りをするが、結婚となると純血主義を保つ。

1981年12月トレス・バラス17地区の二世(179人)、三世(35人)、合計214人に対する意識調査があり、その資料によって、アサイの人々の考え方を探ってみると、次のようになる。

大半が日本人である、と同時にブラジル人であるという意識をもち、二世の95%は日本語を話すが、読み書きの出来る者は50%程度にとどまっている。

彼らは、日本人の好きなどころとして、勉強家、人情、勤勉、正直の順にあげ、伯人の好めるところは、明朗、親切、自由、愛嬌を指摘する。日本語学校を必要とする人、老父母を扶養している人はそれぞれ88%。結婚後両親と同居をする人57%という数字が示すように日本人より日本的、つまり、古きよき日本感覚を残していると指摘できよう。

わずかではあるが日本人を嫌うという日系人もあらわれている。理由は内気、心配性、無愛想利己的をあげ、ブラジル人を嫌う理由は、高慢、横暴、無分別、ずぼらをあげるが、数的にはわずか数%で少ない。

全体の70%は、アサイの移住地が今後発展することを予測し、未来の農業様式としては農牧業39%、小農自作36%、大農ファゼンダ15%、牧畜6%の数値がでており、畑作物は棉、大豆、ミールヨ、小麦、コーヒー、牧畜など現実の土地利用実態や家畜飼養の現状を踏まえ、そう大きな変化はないと予測する。

配偶者での希望は、二世を相手が163人、日本人を相手24人、白人相手10人、白紙17人とでていて、純血主義はかなり強いものと考えられる。

そしてアサイの住み易さは、「平和な生活」「大陸の広大さと未来性」、「住み易い気候」に求め、逆に短所は「保安、社会福祉」、「学校不足」、「社会機構」などを告発している。

以上はアンケート結果の整理である。

次に、1982年8月、アサイの公民館に20人ほどの日系人にお集まり願ったときの発表から数点拾い出しておく。この歓迎集会は、農場主や商店主、弁護士やアナウンサー、新聞記者から大学生も集まった。

“戦争中はいやな思いもした。牢屋にも入れられた。しかし、ブラジル人の巡査にもよい人々がいて女、子供、家族は大切にしてくれた。” “戦後5～6年は日本人が軽視されていたが、1960年ごろより日本の経済成長が手助けとなって信頼関係が急に濃くなった。勿論それ以前から、日本人は、真面目でよく働き、よく勉強すること、そして行動が正しく貴重面だということ信頼されていたのであるが。” “ロータリクラブは信頼と経済力の団体である。ブラジルの組織はアメリカに次いで力をもっているが、最近日系人への加入働きかけが非常に強い。これは、母国日本の繁栄とも関連している。”

“ドイツ系移民は尊敬されても、認められない。それは冷く、計算高く、妥協を知らないからだ。その点、日系人は柔軟で、現地人との融合がよくできている。”

“5年前に日本にいった。感じたことは日本は学ぶところ、旅行をするところではあっても永住するところではないと感じた。日本に帰る意志はない。土地もあり、子供の教育もこちらでしている。教育水準は日本が高く、特に工業技術の面での発展はすばらしくクリチバのパラナ総合大学に日本語学科ができたのをはじめ、日本語の講座を置く大学が増している。”などの声が聞かれた。

アサイ移住者およびその子孫は、ブラジルのなかでも日本人移住地という特殊地域であり、母国日本への郷愁も強く、比較的古い日本を温存する地域ということが以上の点からも指摘できる。

(第8表)

アサイの入植年次別地区別日系、日本人人口構成

(地名区)	1899以前	1900年代	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	混血美女 他	人口計	家族
ベローバ	2	5	9	6	9	18	18	15	27	6	-	115	16
バルサモ	3	11	19	15	37	42	57	68	70	5	-	327	52
フィゲイラ	5	5	18	28	16	34	68	49	51	8	1	283	38
バルミタール	2	16	22	33	39	39	88	71	45	17	-	372	59
グルカイア	-	3	7	2	12	5	7	21	15	1	-	73	10
セボロン	6	3	8	10	14	17	22	17	15	1	-	113	21
ロゼイラ	3	4	17	22	20	22	42	56	33	8	-	227	32
サルチンニョ	-	-	-	-	-	2	-	4	1	-	-	7	1
カビウーナ	7	14	27	33	51	55	96	113	79	13	-	94	12
アモレイラ	3	8	8	29	23	24	36	58	37	1	3	230	39
サンジョン	2	4	3	16	16	13	21	34	19	1	-	129	19
バイネイラ	3	6	10	27	16	28	68	69	33	7	-	267	34
セードロ	-	3	7	10	15	21	23	33	31	4	-	147	22
ホルティラ	-	1	4	5	5	7	11	18	4	-	-	55	9
サンタセシリア	1	7	10	10	25	31	43	64	47	6	-	244	35
中央区	3	8	16	21	12	23	27	24	29	6	-	169	33
市街地	18	118	150	185	259	319	412	355	43	35	12	1906	386
人口計	58	220	339	455	577	713	1056	1090	601	121	16	5246	881

日本国籍586人 帰化人232人 伯国生4,428人 <トレス・バラス移住地資料および50年史で作成>

7. ロンドリナの開拓と今日の農業

アサイから西へ約48kmのロンドリナは、戦前日本人によって「国際植民地」とよばれ、イギリスのパラジュ・シンジケート会社により開発されていった地であり、同社のジャタイジンヤからマリंगाに通ずる鉄道の敷設(1935)によって各国移住者が殺到し、独立小農のシチアンテ入植地として知られている。日本人の入植者数は伯国人、イタリア人、ドイツ人に次いで多く、1950年では全体の約8%(12,500人)にものぼった。

北パラナ鉄道が、イギリスのバルボーザー族によってロンドリナに通じたのは1935年であり、土地分譲は1920年代からはじまったので、その間はサンパウロに通ずるコルネリオ・プロコピオまで悪路が通じていたにすぎない。ロンドリナへの日本人入植は1931年10月の第一陣3家族を嚆矢としている。開拓初期の様子は、サンパウロ市在住の半田知雄氏が「移民の生活の歴史」に記しているので当時の状況を知るために若干引用しておく。

「……山伐り、山焼きが終ると、開拓地の後片づけが行われ、米、豆、とうもろこし等の食糧生産の蒔きつけがいそいで行われる。蒔きつけが終ると、まだ除草は急ぐ必要がないから家建てということになる。材木は近くにいくらかもころがっている。早く家の近辺から、建築用材を集めることは土地の整理ともなった。いちばん利用されたのは、いうまでもなくパルミット(やし)であった。これを四つ割りくらいにして芯を削ぎおとし、上皮の部分だけにして並べ、山のかずらで横棒にからめつけて家の囲いをつくる。かずらは大木についているガインベという“やどり木”の根であって高い木の股から地上までたれている。柱にはペローバ、その他の堅い木を選ぶ。屋根はセードロ、ときにはピーニョ(パラナ松)を割って木端をつくる。寝台はパルレミットがよかったが、テーブルや腰掛は割り木を用いた。戸などは最初の1年間はジュートの空袋をたらしただけ。まるで「のれん」をくぐって家に入出入りするようなものであった。作物は順調に育った。意外なことはこゝで米がとれたことであった。日本人にとって米がとれるということはいへんなよろこびであった。むろん、コーヒーは「金のなる木」だ。しかし、食糧に米がとれるとなれば、安心して生活ができる。

先駆者達の荒山で“米たたき”がはじまる頃は、仮事務所を中心としたロンドリナも、つぎつぎと開拓が進み、2年目の8月頃からは、山焼きの煙が四方の原始林をつゝみ、終日太陽は黄色い顔を出して、すざましい人間の開拓ぶりを眺めることになる。“日本人がどんどん入りこむぞ。景気の前兆だ。さあ、みんな続け!!”というので、ブラジル人も、また各国移民もあとを追う。まだ乾燥期である。トラックはたちまち、パラナ名物のポエイラ(埃)に包まれて姿を消す。

1935年6月に北パラナ鉄道がロンドリナに達すると、1932年サンパウロ州におけるコーヒー植付制限とともに、北パラナの小農の流入は、ひとしおさかんになるのであった。

北パラナ土地会社は小独立農シチアンテの入植を主眼として、1戸最大級30アルケール(75ha)とし、各市街地から4km以内は5アルケールを標準として、大農場の設置をさけたので、シチアンテの増加とともに都市の発達を促し、ブラジルでは、めずらしい急速な都市の発達をとげたのであった。しかも、大会社が売り出す土地であったため、それまで各地で小土地所有者がなめた地権争いの面倒がなかったことなど、安心して小農が定着することを可能にした。」

こうした苦悩の歴史をもつロンドリナは、今日人口32万人の中都市に発展し、同辺は一大農業地帯に変貌していったのである。

ロンドリナは、西域のマリンガ(人口20万人)とともに北パラナを代表する農産物集散都市であり、高層ビルが建並び、1日800頭の肉牛を屠殺するセアザ(市場)を有している。

市街地の周辺にはノルデステ地方から流れてくるカマラーダ(労働者)やボイヤフリア(フ

ファゼンダで働く人々)、町での労働者のためのカーザ・ポプラール(住宅)が、(赤い屋根をもつ平屋の小さなもの)いくつも団地をつくり、それに入れぬ人々はスラムに住んでいる。そして、市街地に住む人々の所得格差は歴然としている。市街地の外側は、つい10年ほどまえにリオ・グランデ・ド・スールから入ってきた小麦が、また1940~50年にかけてサンパウロ方面から導入され、近年急増している大豆畑が広がり、牧場には、インドから輸入した肉牛の改良種ネローレが放牧されている。大きなコーヒー・ファゼンダでかつて、収穫時期のみ北方からの出稼労働者(ボイアフリア)を収容しておく大きな倉庫のような住宅ペオンは、主を失ってガランと放置されていて、コーヒー樹の抜根跡とともに、かつてのコーヒーの繁栄をしのばせる。

ロンドリナが開けて、まだ30年も経過していないにもかかわらず、地域農業は急変し、都市は急成長している。マリングア市にしても、ロンドリナから129km、車で1.5時間にある中都市で、第2次大戦後の1947年、ドイツ人によって開かれた町でありながら、わずか30年で20万人の農産物集散都市に発展しているのである。

北パラナの農業が、最初から商品作物農業として成立してきているだけに、それを消流、加工する業者、肥料や機械を提供する業者がひしめき、街域が肥大している。

こうしたロンドリナ地方の1981年段階の農業状況を附図によって示し、概括しておく。

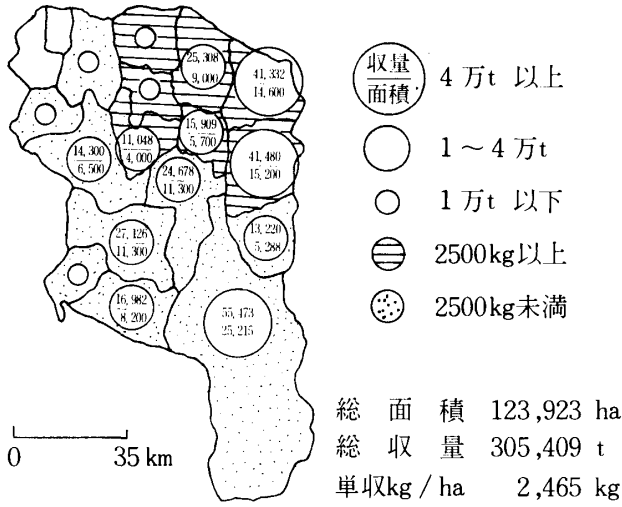
第10図 ロンドリナ市域の地区区分と諸施設の配置



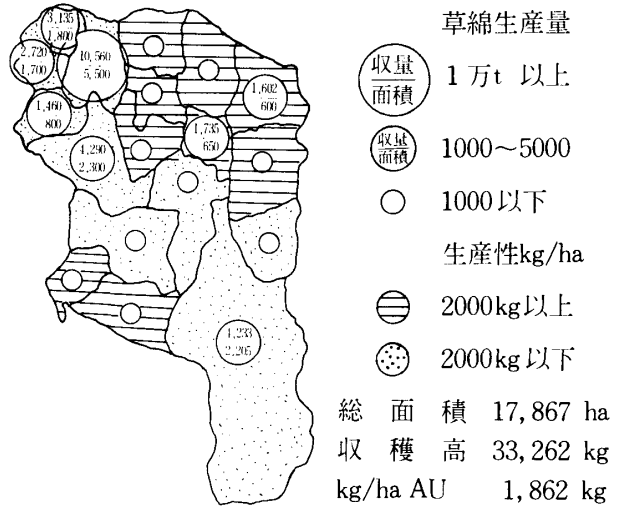
GUIA AO PRODUTOR RURAL (1978)
(SECRETARIA DE ESTADO DA AGRICULTURA)
(CURITIBA-OUTUBRO DE 1978で作成)

第11図 ロンドリナ18地区における主要農作物の生産高と生産性

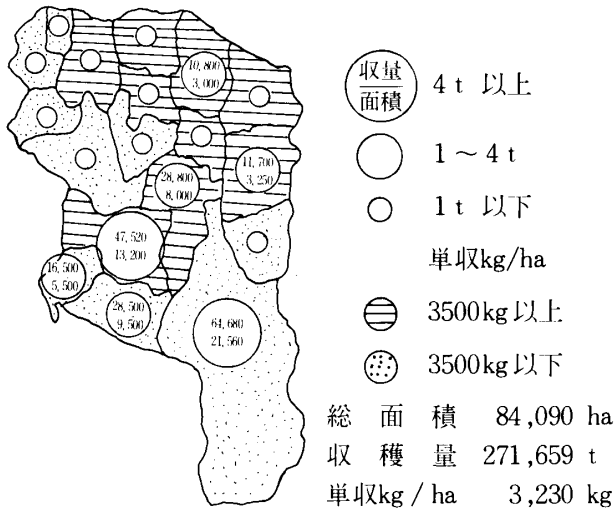
大豆 (SOJA)



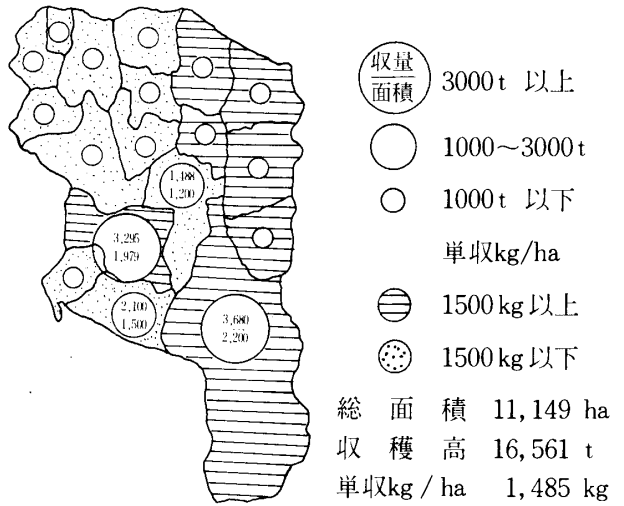
棉花 (ALGODÃO)



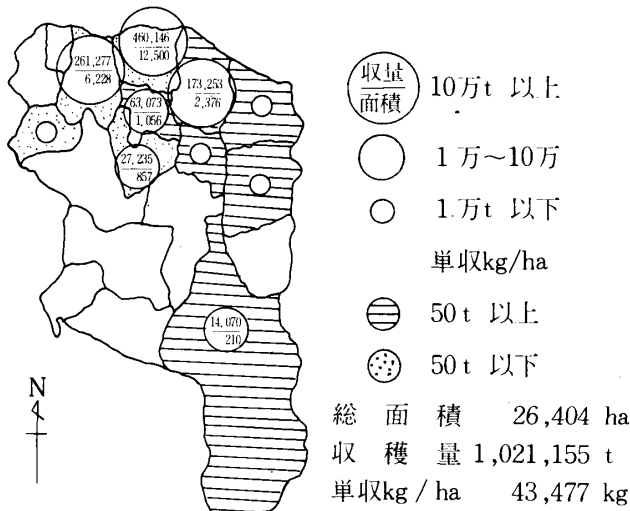
とうもろこし (MILHO)



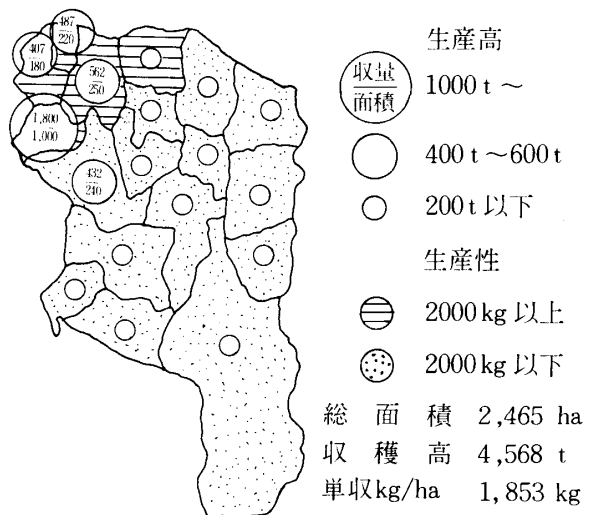
米 (ARROZ)



砂糖きび (CANA DE ACÚCAR)



落花生 (AMENDOIM DAS ÁGUAS)



DERAL COREA'S DERAL LONDORINA 資料で作成

ロンドリナ地区の農業は、北パラナのそれとほぼ同様で、1982年5月の集計によると、大豆（123,923 ha）が首位で、とうもろこし（84,090 ha）、砂糖きび（26,404 ha）、棉花（17,867 ha）、コーヒー（11,842 ha）、米（11,149 ha）と続いており、六大作物を構成している。かつてこの地帯の過半を占めていたコーヒー樹園は影をひそめて、今日では米とほぼ同じ1万haを少々越えているにすぎない。コーヒー減反の理由は、他のパラナ地域と同じ、降霜被害の拡大と労賃アップ、機械化の困難性にある。日系人の発明による早川式コーヒー収穫機があるが、高価でかつ50万本以上のコーヒー農園でないとペイしないことも手伝って、一般的に普及するのは望み薄の状況にある。搾油用と飼料用、粕を目的とした大豆生産は機械化とともに急成長した作物でロンドリナの北部が高生産力地帯となっているが、生産量の多いのは、東部のプリメイロ・デ・マイオ、セルタノ・ポリス、ロンドリナの三地区に集中している。

大豆のha当りの収量はパラナ平均2,240 kgをや、上まわる2,465 kgであるが、ブラジル全体の平均である1,728 kgと比べると相当高い。

とうもろこし生産は、ロンドリナ地区での北部地方に高生産力地帯があらわれているが、逆に南部地方に多収穫地帯が表われる奇妙な現象がみられる。ロンドリナとローランディアが中心的存在であり、規模が大きく粗放的であつても生産力を高めているといえる。とうもろこし生産は、ブラジルのなかでもパラナ州の生産比率が一番高く27%を占めるとともに、サンタカタリーナ州に次ぐ単収の高さを示している。ha当り3,230 kgの高生産力は、そのパラナ平均2,535 kgに比べてもなお800 kgほど高く、かつ安定している。ブラジル北部地方のとうもろこしが極度の乾燥で被害を受けるのと比べ、南部諸地域の気候に適応した作物といつてよい。

砂糖およびアルコール製造原料としての砂糖きび生産は、砂糖の国際相場の高騰、アルコール計画に対する政府の恩点に刺激されて増産が続いているが、パラナ州の生産はブラジル全体の3%の445万tほどであり、ロンドリナは、そのうち100万tを生産するのでパラナのなかでは主産地といえる。ロンドリナ北部のセントナ・リオ・デ・スール、ボレカツ、アルボラーダ・デ・スールの3地区に生産が集中し、特化しており、西南部には皆無の状況が続いている。ロンドリナの平均単収はha当り43tでパラナ平均とほぼ同じであるが、ブラジルの56tには及ばない。砂糖きび生産は、もともと乾・雨期の明瞭なAw気候に適しており、他の地域での生産高は望めない。木綿生産は、セアラ州、パライーバ州など北部に集中する。草綿はパラナ州が全ブラジルの40%に当たる56万tを生産するが、ロンドリナ地方の生産はわずか3万tと少ない方である。だがその1/3は北部のセントナ・リオ・デ・スールであり、日系農家の棉花栽培比率は高い。

棉は、生産コストに占める収穫時の請負費用比率が高く、機械収穫が遅れているため、コーヒーとともに労賃負担に泣く部門とされている。

ロンドリナの米は、日系人によって作りはじめられたが、灌漑用水路が未整備のまま陸稲中心に発展し、土地生産性は低い。ha当りの籾収量は1,500 kgほどで、パラナ平均の1,600 kgにも及ばず、ましてやリオ・グランデ・ド・スール州の3,800 kgの半分以下である。日本の5,000 kgと比べても遠く及ばない。ロンドリナでは東部地域の生産性が比較的高く西が低い。生産量はロンドリナとローランディアの二地区が群を抜いている。

落花生は、海外輸出向けられる部分も多いが、ブラジル第2位のパラナ州のなかでは1/20程度で、わずか4,600 t弱の生産にとどまっているが、その生産は北西部のグアラシ、カフェアラ、ルピオノポリス、セントナ・リオ・デ・スールの4州に集中しているにすぎない。

ロンドリナはコーヒー産地として1930年代以来確固たる地位を築いてきたので、近郊にはコーヒー倉庫やコーヒー製煉工場が林立している。しかしながら1960年代後半からコーヒー生産が急減し、大豆、小麦、とうもろこしなどの生産が急増した。大豆は10月に播種し、3～4月に収穫する。小麦はその輪作物として4～5月に播種し、8～9月に収穫するなどの二毛作も進んできている。大豆と平行してとうもろこしの栽培も行われる。砂糖きびは自動車用アルコール供給のために、政府が補助金を出すため伸びてきている。石油の自給できないブラジルでは、ガソリンが1ℓ130グゼイロであるのに、アルコールは70グゼイロと安い。略奪農法によって地力の消耗が激

しので、近年化学肥料が多投される。しかしその60%は輸入であり、国内生産が需要に追いつかず、肥料費が生産費の上昇に迫車をかけるなど農業をとりまく状況はきびしいものがある。

次に、 Rondônia における規模別農場数とその所有面積を1975年の統計で分析しておく。

先にも述べたように、 Rondônia 地区の開拓地分譲は、当初、大地積購入を排して、シチアンテやシーチョ（100アルケール以下の小地主）のための販売を目的としたこともあって、全般的に50ha以下の小規模経営が多い。 Rondônia における83.9%の農場13,028戸が、この枠に入り、一農場平均17haほどの所有である。そして

(第9表) Rondôniaの規模別農場数と農地面積(1975)

	農場数	面積	農場化	面積比
0～50ha	13,028	227,489	83.9	32.8
50～100ha	1,294	85,624	15.0	40.5
100～200ha	626	80,749		
200～500ha	402	114,331		
500～1,000ha	103	68,173	1.1	26.8
1,000ha以上	71	117,575		
合計	15,524	693,941	100	100

< Cadastro do INCRA で作成 >

500 ha 以上の大規模経営のファゼンダは、わずか1.1%の174戸で、この平均値はパラナの水準より低い。このクラスの戸当り平均では1,068 haとなるが、パラナ平均をかなり下まわった数字となっている。パラナ州のなかでの大型ファゼンデイロの多い地帯は、東北のジャカレチーノ(8.3%) 東南のパラナガイ(5.5%) などの地域もあるが、逆に、クリチバ(0.5%)、マリンガ(0.4%)、パト・ブランコ(0.3%)、イバイ・ポーラン(0.5%)は Rondônia の1.1%を下まわっていて大規模ファゼンダないしシーチョともいえる50～500 ha層は40%と、パラナ水準の34.6%を上まわっており、この階層の平均は121 haにとどまっていることがわかる。

パラナには日系人の巨大ファゼンダは少なく Rondônia やアサイに居住するファゼンデイロで大地積をもつとしても、アマゾナス、ミナス・ゼライス、マツト・グロッソなど中部から北部の低地価地帯を近年になって買収している程度である。

ブラジルでは、農場規模の格差が大きく、平均値という数値があまり意味をなさないのが実態といつてよい。

8. 北海道出身の Rondônia 人

Rondônia は北パラナにあり、パラナ州ではクリチバ市に次ぐ第2の都市で、人口は32万人の農産物加工、集散都市である。この町に住む日本人、日系人のうち、北海道出身者を拾いあげてみると第6表の通りとなる。

既に子孫がなく、絶えてしまった家系も3戸ほどあるが、北海道出身で Rondônia 在住者世帯は1981年段階で59家族、他の4家族は近隣のジャタイジンニョ市、イビポラン市、アプカラナ市に在住している。

Rondônia は、「小さなロンドン」といわれるように、1929年イギリス系バラジュシンジケートの用地分譲によって拓かれた土地であり、この分譲地はオランダの全面積に匹敵する544,000アルケール(1アルケールは2.4 ha)にも達する広大な地積を有していた。

入植した北海道出身者の渡伯年月日は、 Rondônia 開拓以前の人々が6世帯のみであるがその後の入植者も含めて、多くの人々はサントス上陸後、サンパウロ州のコーヒー・ファゼンダ(大農場)でコロノ(小作労働者)生活を6年前後送り、自作地を求めてここに移住したのである。渡伯年月日は1930年代に集中しており、これらの北海道出身者は、いずれもコロノ生活で資金を貯え、わずかばかりの土地(だいたい20アルケール)を購入して自作農になったが、戦後になって Rondônia 市が拡大するにつれ、農地を売却して離農し、市街地で商業、工業、その他の職を得ることになる。そして今

まで農業を営む家族は、北海道出身世帯の43%の23戸になってしまった。市域での農業は、コーヒーが多いが最近では、北パラナの他地域と同様、小麦、大豆、畜産のウェイトが高まり、他方では近郊型園芸農業であるブドウ栽培、野菜栽培を指向する農家も増えたのである。この地でもアサイと同様、日本人、日系人の離農跡地は、同郷の人々や日系人によって買い求められる傾向があり、残存農家は都市近郊でありながら規模拡大が進んでいる。

北海道出身者の移住起点になった市町村をみると、全道に分散しているとはいえ、やはり空知、十勝、上川、宗谷、網走の町村と、札幌市を含む石狩低地帯の市部の多いことがわかる。1930年代は、北海道が、なか1年をはさむ4年連続の大凶作に見舞われた時期であり、地主制下での小作人の移住が多かった。1931、32、34、35の冷害は、米作地帯、畑作地帯を問わず、北海道の農村地域に大打撃を与え、小作料の減免争議や、小作農の逃散があり、満蒙開拓とともにブラジルは生活のための新天地であったのかもしれない。鎌倉丸や河内丸の日本移住船のほかマニラ丸、ハワイ丸、アリゾナ丸、サントス丸やリオ・デジャネイロ丸が移民を横浜、神戸からサントスに向け2か月間の船旅に誘引していったのである。

家族移住が中心のなかにあって、当時の一世は次第に少なくなり、当時子供であった人々や二世が、移住50年の今日の中堅的働き手となっている。

外地での生活、生産ということもあって、北海道に在住する都府人が県人会をつくると同様に、北海道出身者は道人会を結成し、日常的に交流をもちながら結束を強めている。

サンパウロに北海道人会本部があり、ロンドリナにはその支部がおかれている。既に一線を退いた日系一世にとっては、郷里の人々との集いがなによりの楽しみとなっているのである。

第10表 ロンドリナ市における北海道出身者の着伯と現職業

家長名	本籍	着伯年月日	着地名	船名	現住所	職業
村尾 秀興	上川 美英町	1933. 4. 15	サントス	アラビア丸	ベレン街	商業
村尾 正修	"	"	"	"	カーラ・デ・カジャード街	獣医
上野 荒太郎	空知 美唄市	1930. 8. 23	"	鎌倉丸	カライーバ街	商業(各種皮革)
野尻 隆次	" 中富良野町	1932. 5. 25	"	アラビア丸	ピオ・ドーセ街	農業
野島 薫	札幌 札幌市	1924. 2. 28	"	河内丸	オーロレット街	テレビ、ラジオ修理組立
野田 昭	小樽 小樽市	1932. 6. 29	"	マニラ丸	アサイ市インドストリアル街	アナウサー
草野 利勝	空知 栗沢町	1933. 7. 29	"	アリゾナ丸	イバアイ街	商業
山田 勉	後志 倶知安町	1932. 7. 7	"	マニマ丸	セルジッペ街	洋裁業
安中 末次郎	美唄 美唄市	1928. 3. 14	"	マニラ丸	マラニオン街	写真業
松原 喜一	釧路 釧路市	1928. 11. 23	"	ハワイ丸	カッペベリベ	運送業
前田 重貫	宗谷 歌登	1919. 7. 14	"	鎌倉丸	グアホレ街	商業
前塚 嘉市	十勝 芽室	1920. 9. 5	"	河内丸	ジャタイジンニョ市	農業
丸山 輝蔵	空知 中富良野	1928. 12. 26	"	アフリカ丸	イビボラン市	"
福田 徳治	宗谷 頓別町	1932. 8. 2	"	リオデジャネイロ丸	フランシスコ・フィジョサンセイス街	"
藤沢 文吉	深川 深川市	1937. 2. 28	"	モンテビデオ丸	サンサルバドル街	商業(卸商)
藤沢 敏夫	"	"	"	"	"	農業(牧場)
小坂 康平	函館 函館市	1934. 10. 23	"	アリゾナ丸	ベンジャミン・コンスタンチ街	食堂経営
安達 靖夫	空知 多度志町	1933. 3. 3	"	ブエノスアイレス丸	イビボラン市	農業
大野 勲	名寄 名寄市	1931. 7. 3	"	クオ・デジャネイロ丸	中央区	"(コーヒー、ブドウ)
荒井 正雄	江別 江別市	1932. 8. 20	"	ラブラタ丸	レンドイア区	"("、養鶏)
阿部 正	宗谷 下頓別	1932. 6. 2	"	リオ・デジャネイロ丸	グアホレ街	タイヤ再生業
阿部 武光	"	"	"	"	"	"
櫻井 正一	渡島 上磯町	1932. 2. 24	"	ブエノスアイレス丸	サンフランシスコデアシス街	農業(コーヒー)
桜井 力	"	"	"	"	中央区	"(ブドウ)
斎木 勇	空知 妹背牛町	1930. 8. 29	"	モンテビデオ丸	アントニナ街	商業
笹原 常雄	網走 遠軽町	1932. 6. 29	"	マニラ丸	サンフランシスコ・フィジョンサンセイス街	"
佐々木竹男	" 湧別町	1934. 3. 3	"	サントス丸	ジャビベルベ街	"
佐藤 隆也	" 遠軽町	1932. 6. 29	"	マニラ丸	シング街	会計事務所
菱沼 喜高	宗谷 中頓別町	1925. 11. 2	"	ハワイ丸	アベニダ・カフェ大通り	製米所
菱沼 喜信	"	"	"	"	"	商業
鈴木 基	小樽 小樽市	1941. 8. 12	"	ブエノスアイレス丸	アラグァイア通り	鉄工所
鈴木 郁夫	"	"	"	"	ブルデンテ・デ・モライス	鉄工所
伊藤 富雄	上川 鷹巣村	1935. 1. 1	"	リオ・デ・ジャネイロ丸	クレベランディア街	機械工
長谷川三吉	後志 岩内町	1931. 3. 5	"	ブエノスアイレス丸	バリアノ街	農業(コーヒー、ブドウ)
蓮田 利夫	小樽 小樽市	1938. 3. 5	"	リオ・デ・ジャネイロ丸	ゼネラル・ホルタ パルボザ街	(時計、指輪、貴金属)
" 昭夫	"	"	"	"	コロコボード街	商業(時計、指輪、貴金属)
浜田 勝義	札幌 札幌市	1933. 7. 29	"	アリゾナ丸	ギリルミエ・ミ・コレア街	農業(大豆、コーヒー)
遠田 秀雄	十勝 足寄町	1933. 7. 29	"	"	シイロ・ロシア・レイチ街	"
沼田 貞作	札幌 札幌市	1933. 7. 29	"	"	アルバロアロス・デ・フリエイタス街	農業(小麦、大豆、コーヒー)
沼田 信一	"	"	"	"	ラボフ・タパリス街	"(小麦、大豆、コーヒー、牧畜)
沼田 吉太郎	"	"	"	"	セナドール・ソウザナベス街	"(小麦、大豆、コーヒー)
沼田 政治	"	"	"	"	サントス街	"(")
緒方 義行	網走 網走市	1933. 2. 25	"	サントス丸	セルジッペ街	理髪業
片岡 嘉輔	空知 幌別	1933. 1. 11	"	アリゾナ丸	オーロレット街	書記
柏葉 卓一	十勝 芽室	1956. 10. 24	"	アフリカ丸	モッソロ街	バラナ新報社(印刷業)
河端 昭一	小樽 小樽市	1933. 6. 26	"	モンテビデオ丸	ツッキデカシヤ街	商業
加藤 正一	宗谷 中頓別	1932. 7. 2	"	"	キンケーノ・ボカエーバ街	"(皮革および靴)
神 勲三	札幌 札幌市	1933. 7. 29	"	アリゾナ丸	ゴヤエス街	農業
川尻 国松	深川 深川市	1929. 2. 8	"	マニラ丸	イビボラン街	"
吉井 篤	札幌 札幌市	1931. " "	"	ラブラタ丸	プロフェソール サムエル・デ・モラ街	建築業
谷沢 和夫	空知 多度志町	1933. 4. 18	"	アラビア丸	トカチンチス街	農業(コーヒー)
高地 直彦	"	1933. 3. 26	"	サントス丸	ルビアセ街	"(コーヒー、ブドウ、養鶏)
室田 稔	"	1933. 3. 3	"	ブエノスアイレス丸	"	"(")
高橋 弘	小樽 小樽市	1930. 10. 3	"	ラブラタ丸	シェレ街	"(コーヒー)
竹田 政雄	空知 沼田町	1929. 2. 25	"	鎌倉丸	アントニナ街	電気工、サエル電商経営
立川 春雄	札幌 札幌市	1934. 3. 3	"	リオデジャネイロ丸	ゴイアス街	商業
山中 光雄	空知 砂川	1932. " "	"	アフリカ丸	マアエイル街	歯科医
土田新太郎	十勝 音更村	1934. 6. 23	"	アラビア丸	セルジッペ街	自動車修理業
名久井 一	富良野 富良野市	1931. 1. 10	"	サントス丸	バラナ州、アプカラ市	商業
中岡 菊雄	空知 中川町	1919. 7. 14	"	鎌倉丸	ツッキデカシヤ街	"(食料品)
中川 一郎	上川 鷹巣村	1935. 1. 1	"	リオ・デジャネイロ丸	バラナバネーマ街	鉄工場経営
南保 友勝	札幌 札幌市	1929. 9. 7	"	モンテビデオ丸	セルジッペ街	タイヤ再生工場経営
南保 司	"	"	"	"	ルビアッセ区	農業(ブドウ、野菜)

<日本人会名簿と聞きとりにより作成>

9. 結びにかえて

アサイは、1929年四大移住地の1つとして海外移住組合連合会により開植されたトレス・バラス移住地の中心で、ロンドリナの東方に位置する日系人比率の高い入植地である。

周囲の農場における日系人所有面積も広く、ウライ、ロンドリナ以上に日系人の特色を生かした農業経営が行われ、街づくりが進められた地域でもある。

他方、ロンドリナは、北パラナ地方の中心で、アサイと同じ1929年、イギリス人のパラジュシンジケートによって開植されたが、鉄道の開通や、中心地としての立地条件を生かして、1969年には人口が14万人、1982年には32万人へと膨脹し俗に“コーヒーの都”〈Capital do Cafe〉と呼ばれるように、コーヒーの集散とコーヒー栽培の基地として発展してきた。北パラナの同様の性格をもつアプカラナやマリंगाに比較しても、わずか30年間における都市の急成長は驚異的といえる。市内には高層ビルが林立し、商工業が密集しているが、その周辺部はコーヒーの集荷所、製熱工場、倉庫が幹線道路にはりつくように配置されていて、ブラジルのなかでも活気ある町として拡大してきたのである。ロンドリナは日系人をはじめ、西欧各地からの移民により、そして北部方面からの移住民（メスチソ・ムラート等）が混住した社会が形成され、経済、文教の中心（大学は3つ）となっている。

一面コーヒー樹海であったロンドリナ地方も、1979年には、首位の座を大豆（124,000 ha）に譲り、第2位（118,000 ha）に転落したが、パラナ州内では、いぜんとして、砂糖きび、棉花の急増で、コーヒーに関連する産業が不振になりつつあり、新しい農産加工や消流ルートの構築が迫られる日程となった。同様の傾向は、アサイやウライ、マリंगाにも顕われている。

こうした地域の所在する北パラナは、ブラジル南部の中堅州にあっても、豊饒な土地と降水量、気温などの自然条件に恵まれているため、農作目選択の変換にも容易に対応できる条件である。だが、押し寄せる国内・外情勢の変化は否応なしに北パラナの農業生産構造を変えていく。

強力なインパクトとなった条件は、第1に農業労働者賃金の上昇と、政府設定の最低保障賃金制度の確立などにより、農業の近代化が焦眉の急となってきたことである。サンパウロ州の事例調査であるが、1974年から80年の7年間に、固定使用人の日給が134クルゼイロから1,330クルゼイロに、臨時雇用は16.3から165.9クルゼイロへ上昇、月の最低保障賃金も377から4,164クルゼイロとはねあがった。勿論、インフレの影響もあるが、コーヒーや棉花のように収穫労働が機械化しにくい部門にあっては、土地利用の転換もやむを得ないのであり、この傾向は全ブラジルに及ぶ様相をみせている。

第2は、農耕地の実勢価格の値上りと、長期に亘る略奪農業による地力の低下があげられる。パラナにおいての平均耕地価格は1976年に1 ha当り8,146クルゼイロであったものが80年には、67,989クルゼイロへと上昇した。上昇率735という数字である。このことは、土地価格が半値である放牧地や未開墾地（原野）の取得と開墾による耕地面積の外延的拡大をもたらし、同時に輪作、間作を含めた土地利用の高度化を必然化する。略奪農業からの脱却は、有機質肥料の投入という手間のかかる方法ではなく、手取り早い化学肥料の多投へと走らせる。年々、土地生産力の向上はみられるが、長年にわたる化学肥料の投入が連作障害や病虫害の発生に結びつくことは、既に先進諸国で実証済みであり、今後不安材料を残していくことになる。

第3は、国際的需要動向や国内状況に見あった作目選択や土地利用、農業経営のあり方に対する問題である。ブラジルにおける農産物輸出比率は低下してきており、総輸出額（1980年、200億ドル）のなかで50%になり、半分で切ろうとしている。主なものはコーヒー豆（25%）、大豆粕（14%）砂糖（13%）であり、逆に小麦（37.6%）をはじめ、米、牛肉の輸入が増えている。鉱産物開発、工業化の波のなかで中進国から先進国へ向うブラジルで食糧の国内自給やエネルギー資源（砂糖アルコール）の確保は重要性を増しつつある。

こうした情勢のなかにあって日系人の多いロンドリナやアサイでは、霜害を契機にしてコーヒーから雑作への機敏な転換、離農跡地の取得による規模拡大、機耕化、化学化など近代化路線の

拡大、高地価地帯である北パラナの土地を売却してのマット・グロッソやミナス・ゼライスへの転住など激しい動きがでている。

わずか40～50年前に移住した日系人にとって、地盤を確保し、安住の地となった筈のロンドリナやアサイが、今後とも安定した農業経営が保障できる条件ばかり整っているわけでは必ずしもない。しかし、移住入植後の勤勉で惜しみない労働投下と先見性をみると、そこには大きな夢が託せるようにもみえるのである。

1982年8月 学校法人札幌大学の短期海外研修の助成金を得てブラジルに足を踏み入れることができた。そして国際地理学会のPre Congressがブラジル南部パラナ州のロンドリナで開かれることになっていたため、筆者は当地にやってきた。しかし、アルゼンチン紛争などの影響で、会議は一週間延期になり、リオデジャネイロでの本会議と平行して行うよう変更されたことが、現地ではじめて知らされたのである。いかにもブラジルらしい。そこで計画のあいた1週間日系人の比較的多いロンドリナ、アサイの2地区を勢力的に調査することにして、約1週間を当地での仕事にあてた。ロンドリナ大学のYoshiya Nakagawa教授が、毎日車を出してくれ、調査地との連絡をとってくれたので効率のよい踏査ができた。聞きとり調査は、日系人が公民館やレストランに集まって集中的に聴取できた。資料関係は農務省ロンドリナ支所農林経済課で提供してくれたが、この世話話は研究員のHajime Kato氏が心よく引き受けてくれた。資料の提供とポルトガル語の訳などは、本学講師の守下幸子さん、国際協力事業団の嶋田憲治さん、北海道海外協会の池盛武さん、北大経済学部留学中の大学院生CARLOS Hideo Arimaさん、医学部のLIDIA Kasumi Suzukiさんにお世話頂いた。また地図、資料蒐集と郵送に関しては、トレス・バラス移住地の一世の方々とChiyoji Fujitaさんに再三、手をわずらわした。ここに謝意を表する次第である。この小稿がロンドリナに住んでいる北海道出身者、トレス・バラス移住地の人々に読んでいただければ幸いである。

参 考 文 献

1. 佳山良正編『ブラジルの日系農家』兵庫農科大学ブラジル移民実態調査団派遣委員会、藤本印刷所 1967. 10. 10
2. 半田知雄著『移民の生活の歴史』「ブラジル日系人の歩んだ道」サンパウロ人文科学研究所、桜井広齊堂 1970. 6. 20
3. サンパウロ人文科学研究所『ブラジル日系社会のいぶき』日本移民70年記念論集 研究レポートⅦ トップラン・プレス社 1978. 6. 1
4. 鈴木良三、松田蒔四郎、小野 功共著『ブラジル日系農場の成立と発展』、明文書房 1980. 4. 20
5. トレス・バラス青年連盟編『トレス・バラス移住地』開拓25周年記念、奥付なし
6. 『トレス・バラスの移住地50年史』パラナ新聞社、1982.
7. SECRETARIA DE ESTADO DA AGRICULTURA DEPARTAMENTO DE PRODUCTIVIDADE 『GUIA AO PRODUTOR RURAL』CURITIBA OUTUBRO DE 1978.
8. SECRETARIA DE ESTADO DA AGRICULTURA DO PARANA 『ACOMPANHAMENTO DA SITUACAO AGROPECUARIA DA PARANA』1982.
9. ピェール・モンバーク著、山本正三、手塚章共著『ブラジル』白水社 1981. 7. 10
10. フレデリック・モーロ著、金七純男、富野幹雄共訳『ブラジル史』白水社、1980. 3. 8
11. 山本進著『中南米』岩波新書、371 1965. 10. 30
12. J. ボージュ・ガルニエ、C. ルフォール共著、大原美範訳『ラテン・アメリカの経済』白水社 1982. 3. 10
13. アジア経済研究所、アジア経済研究シリーズ22『ブラジルの経済構造』1962. 2. 28
14. 桑村温章著『ブラジル』『変貌する経済と社会』時事通信社、1975. 2. 20
15. 齊藤広志著『新しいブラジル』「現地からの特別報告」サイマル出版、1974.
16. 西川大二郎「序論、ラテンアメリカ農業研究の視角」『ラテンアメリカの農業構造』アジア経済研究所、1974. 9. 30
17. ブラジル公論社編『ブラジル百科事典』大日本製本KK、1969. 4. 30